一九五六年
千曲會報
第五五号

昭和三十一年四月二十五日印刷
昭和三十一年五月一日発行
編集兼発行人　信州大学繊維学部内　小山長雄
印刷人　上田市原町　中沢正
印刷所　信大繊維学部内　中沢印刷株式会社
発行所　社團法人千曲会

（定価1部15円也）

アジア蚕業技術開発協会と日本シルクセンターの構想

唐澤正平

緒言

昨年五月、土木、建築、機械、水産、農業等、各界の名士が寄った或る会合で、皆、自己の職業を通じて、アジア中近東の開発に関し、熱心に協議し、夫れが直に、世界平和の一助になるとの信念で、意見を発表された。

之を見て、四十年来の蚕糸業人である私は、斜陽産業と言わるる、蚕糸業を通しては之等の人々に、伍して行けぬと考え、心、甚だ、淋しいものがあった。

アジア、中近東の實狀

然るに、私は、昨年八月来日した、印度国民会議派上院議員、アヌップ・シン博士が難民救済、農家の、家内工業化の、参考に資し度いから、との希望で、養蚕の、足踏器械及び、座繰工場を案内した其の際、同氏が、其の視察に非常に、熱心なのに感激した。

更に、昨年六月、レバノン政府に招かれて、横山国立蚕糸試験場長が、現地を調査され、七ー八月、同場竹内技官が、蚕種、蚕具を携行して、養蚕を指導し、非常な成功を納められた。その実狀を聞くと、レバノンの養蚕技術の幼稚さは、丁度、日本では明治二十年代の養蚕を、彷彿させる狀況で、之を指導しても、相当になる迄には、三十ー四十年を、要するだろうと考えられる。

更に、国連FAO職員として、ビルマ、イラン等で、蚕業を指導し、帰国された人々の話でも、民衆は、絹に対して、非常な関心を、持つて居る様子である。

日本蚕糸業界の現狀

一方、日本の蚕糸業は、昨年三十万俵の生糸が出来たが此の上、飛躍的の増産は、仲々、困難である。と言うのは耕地面積、人口食糧問題、其の他の事情から、今後、桑園面積の拡大は、余り望めず、これからの増産は、反当収繭量の増加に待つ外なく、其の上、他作物との関係もあり、今後は、東山道、関東、東北等に、漸次、圧迫される運命にあることを考えると、三十五万俵内外が、先づ、極限と見るべきであろう。

又蚕種の製造数量も、三千五百万貫内外の、産繭額に対しては、現在の、六千万瓦以上は、余り、伸びる余地が無い。

然し、蚕糸業に関する学術は、明治以来、改良進歩を辿つたので、其の発達は、世界のトップである。

又、年々、蚕糸学会等で発表される研究業績は、三ー四百項目にも達する壮観を呈して居る。然し乍ら之を、更に、一層有効に利用する途を講じなければ、あたら、国費と、研究者の精力の浪費となり、真に、惜しいものである

更に、東京、京都、上田の三大学部を初め、各地の高等学校、各県蚕試講習所等の、卒業生も、年々、就職口を探すのに、各当事者が苦心、惨胆たるものがある。

後進地開發の利點

この、アジア中近東諸国の実狀と、日本蚕糸業界の現狀を、勘案する時、改良進歩した日本の学術を修めた、蚕業技術者に、蚕種、蚕具、桑苗、簡易繰糸機等を携えて、未開地の、蚕業開発を、親切に、指導せしめる為に、派遣することは、まことに、時宜を得たことと考える。

即ち、日本蚕糸業界に在る前記、諸困難の解消にも役立ち、其の上、各地に、絹を宣伝普及し、其の国の富を増し、

更に、其の民族に、シルクを、身に着ける、幸福感を味わわせることとなるばかりでなく、其の地方の、民族及び生活の向上を促し、延いては絹の消費増を誘致し、其の販路拡張をも齎すこととなる。

其の上、其の地方に、日本国民を理解せしめ、相互の親善友好を増し、平和的に、日本民族を、各地に、進出分散せしむる、契機ともなる。

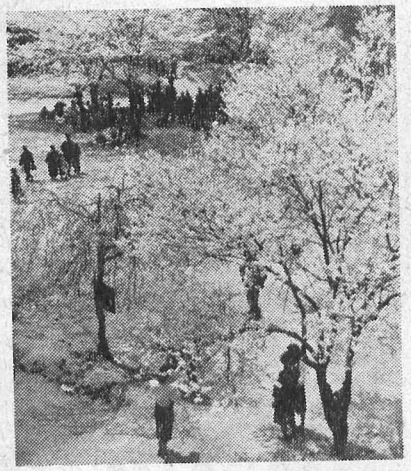
中共生糸と繭の生産

然し、斯う言うと、其の為めに、日本の蚕糸業が、潰滅すると言う人もがあるか知れぬ。

殊に、斯う考える人々の、最も恐れるのは、中共の蚕糸業である。現在、中共生糸は日本生糸の、十九万円ー二十三万円より、格安であるから、一層恐れられて居る。

一体、戦後の生糸の値段は人絹、化繊綿、毛等の値段に比べ、其の倍率が、戦前に比し、非常に、割高である。

即ち　左表を見ると。



花の園
（小諸懐古園にて）

	生糸値段の他繊維に対する倍率 戦前（一九三〇、三五、三六平均）（一ポンドセント）	戦後（一九五〇、五一、五二、五三平均）（一ポンドセント）	物価指数 一九五〇	物価指数 一九五五
生糸	一五六、一	四七五、三	一〇〇	一三六
ビスコース	四、七倍	一二、八四倍	一〇〇	一一三
綿	一二、七	一二、八四	一〇〇	九〇
羊毛	一、八八	二、四二	一〇〇	六七
	USA繊維価格に依る		USA物価指数に依る	

つまり、現在の最低十一万円、最高二十三万円、と言う値段が、高過ぎるので、之を最低十六万円、最高二十万円位とし、十八万円中心とすれば、価格では、充分、中共生糸と競争出来る。

生糸、一俵十八万円は、繭元、八〇〇〇掛であるから、一体、全養連、二九年度繭生産費調査に依ると。

調査農家	CBA	反当収繭量	一〇〇目当り生産費	一〇〇目当り現金支出量	一〇〇目当労働時間	一〇〇目当収繭（約）労働時間
	三五、四七五	一、一五七円	六五八円	五、六一〇	一一〇二
	四三、五二一	一、一一一	五七五	五、五一〇	七七一
	二七、二八一	一、一八二	一三七	七、〇七	一一八〇

春繭糸量、十七匁とすれば、生繭一貫目一、三六〇円である。

最近、関東の、或養蚕組合長の会合で、一貫匁、一、三〇〇円なら、尚、増産すると言つて居たし、東北地方では一貫目一〇〇〇円でも、増へると言う人がある。

とある。即ち、繭一貫目一、三〇〇円とすれば、現金支出五五〇円—六〇〇円を差引いた残り、七〇〇円—七五〇円が労働時間一七——二〇時間に対する報酬である。之は皆自家労力であるから農家労働の一日——一日半で繭一〆目が穫れる訳で即ち八、〇〇〇掛で売れれば、他の一般作物に比し有利であるから尚増産出来る訳である。結局、繭値が八、〇〇〇掛内外では、他の作物に比し、算盤が採れぬと言う様な地帯では、繭の生産は、だんだん縮小される、傾向にあると見るべきであろう。

未開地蚕業開發の困難

アジア中近東の、未開発地には、宗教の関係で、絹は着よいが、殺蛹したり、煮繭繰糸することが、困難だと言う様な地帯もあるので、日本の技術者が、派遣されて、指導しても、蚕糸業の開発は、容易ではないと思われる。そして、之等各地に、蚕業が普及し、生糸が生産される為に、日本の蚕糸業が脅威を感ずる様になるには、少なくも、二——三十年を要すると思われる。

技術の秘密は保てない

未開地の蚕業開発は、日本の蚕糸業を、圧迫するから、日本の蚕糸技術は、出来る限り、秘密にしろと言うのは、余りに、消極すぎる。日本が秘密にしても、既に国際連合のFAO職員として、日本の技術者が、イランやビルマに日本の蚕糸技術を指導しているし、インド、パキスタン等からも、年々留学生が来て、日本の技術を学んで帰つて居る。その上ソ連は、日本占領時代に、日本の蚕品種や、文献を、占領軍の勢で持ち去り既にコーカサスに、大きな蚕業試験場が出来て居ると聞く又、中国は、戦前は日本の蚕品種は殆ど、全部移入し、蚕糸業関係の図書は、全部飜訳されて居た。戦争中、日本の政策に依つて、華中蚕糸公司が創立されたため、中国蚕糸業者が、雲南、四川の奥地に蹈逃し、皮肉にも、奥地の蚕糸業開発を招来した。中共政権となつてから、更に、五ヶ年計画等に依つて、江蘇浙江は勿論、奥地に迄、製糸工場及試験所、指導所等の設置を見つつあるので、生糸の生産数量も輸出数量も左表の如く逐年増加しつゝある。

中共生糸進出状況

輸入数量(俵)		総輸入数量に対する中共生糸の割合
仏	一九五一(一月—九月)	一九五一(一月—九月)
瑞西	九二〇俵	五、六%
英	六二〇	九、五
独	二、八七〇(一九五四) 七九五(一九五五) (一九五四)八二〇	二三、五%(一九五五) 一七、〇(一九五四) (一九五四)二五、二

× × ×

更に、最近、昨年の農林省蚕糸試験場の各主任博士が、共同で編纂した「綜合養蚕学」を印度人カーン氏が飜訳許可を得て帰国した例もある。

之等を考えると、日本の蚕糸技術は世界のトップだから秘密にしろ、などと言つても到底、秘密になど、出来るものでない。尚、現在こそ日本が蚕糸業の学術に就てトップを誇り得るが、ソ連、中共の進歩を想えば、何時迄も、現状の儘の差ではあり得ない。

殊に、最近のソ連、中共とアジア、中近東諸国の国際状勢に、想いを到ると、日本がアジア、中近東の開発に手を拱ねいて居れば必ず蚕糸業に就ても、ソ連、中共が指導に乗り出すものと見ねばならぬ。其の暁では既に遅い。

むしろ、此の際、進んで、日本の技術によつて、後進地の蚕糸業を開発し、其の主導権の確立を急がねばならぬ。

對策

然し、私は、二—三十年後の、後進地開発に備えて、日本蚕糸業界は、此処に、二つの、手段を、執ることを提唱する。

即ち、**アジア蚕業技術開發協会と、日本シルクセンターの創立**、之である。

蚕糸業政策の轉換

私は、此の二—三十年後の生糸多産に依つて、日本蚕糸業が、脅威を感ずるに到る以前に、「日本は、世界生産の全生糸を、日本で消化すること、の計画を、今日から、準備すべし」と、提案する。

我国は、安政の開港以来、一世紀に亘り、生糸で輸出することに、主力を注いで来たが、之は、当然、絹及び加工品で、輸出する方向に、国の蚕糸業政策を、漸次、転換すべきである。

日本シルクセンター

其の一方策として、私は、茲に、強力なる、日本シルクセンターの設置を計画し度いと思う。出来れば、其の設置の場所は、現在の蚕糸会館を利用すれば、都心であり、日本に来る海外旅行者も、此処に来れば、一目で、日本並に世界の蚕糸業の実態を、観ることが出来る様にすれば、絹業の宣伝にも好都合で、便利である。

折角、日本に来た記念に、絹を買い度いと思つて、銀座を探し歩いたが、ナイロンや人絹の交織で、純絹を、手に入れるのに、惑う、海外旅行者があると聞いて居る。

絹に不馴れな、海外旅行者も、此処に来れば、安心して純絹を手に入れることが出来る様にし、土産品や、少量の買物は、其の場で、即売するがよい。同時に、絹織物の大量取引を、希望する顧客には直に、其取引契約にも応じ得る、常設見本市の様なものを設ければよい。其の為めに、此処に、全国各機業地の、有名会社の即売所を、名店街式に、設置し、絹の宣伝普及と販路拡張に、資し度いと思う。

又、進んでは、今日の交通機関の、発達を利用し、パリ、ロンドン、ニューヨーク、ミラノ等、世界各地に、此の、日本シルクセンターの、支店出張所を設け、其の地方の流行を、二—三日で、東京に吸収することが出来る様にして「世界絹業の流行は、東京から」と言う様にすること。及び、此の、日本シルクセンターが、世界絹業の中枢として全世界の生糸需給を、支配する事が出来るようにすることを、今から計画して、二—三十年後に備うべきである。

最近、高松宮邸の、光輪閣に、絹物が陳列されて、海外旅行者に、観せることとなつた様であるが、まことに、結構なことである。

之を、更に、大きく、且つ力強い、庶民的なものとして今後の、日本の蚕糸業方向を百八十度廻転する、原動力となる日本シルクセンターを、今から、育成し度いものである。そして、世界に、生糸が多産された既には、全部之を、日本で消化し、「シルクは日本で」、と言うことに、全世界の人々が、認識する時期を一日も早く、招来したいものである。

又、日本シルクセンターの概要を、掲げると、

一、蚕糸業に関する、見本標本の陳列展示
二、日本並世界の蚕糸業の実状を、一目瞭然、展観し得る施設
三、蚕糸業関係図書館の設置
四、蚕糸業製品の即売、宣伝、輸出並斡旋
五、有名業者の、常設見本市的、名店街の設置
六、絹業に関する、流行の吸収、及宣伝
七、技術者の訓練、養成、講習講話の開催
八、其他

アジア蚕業技術開發協会

即ち其の第一着手として、アジア蚕業技術開発協会を創り、海外各国政府、及び、各国の信用ある団体と、連繋して、派遣技術員の、身分安定を図り桑苗、蚕具、簡易繰糸機等、未開地の、蚕業開発に必要なものを携えて、先づ、アジア中近東等に、蚕業技術員を派遣したいと考える。

次に、アジア蚕業技術開発協会創立趣意書を掲げる。

アジア蚕業技術開発協会創立趣意書

絹は衣料美の最高峰であるデウヴォンの広告に「絹よりも美しく、鉄よりも強いナイロン」とあるが、之は「衣料美の第一は絹だ」と言う証明である。

ダイヤモンド、ゴールド、シルクの三者は、人類が身につけたい慾望の、対象であることに今尚変り無い。世界に於ける絹の生産は、全繊維量の〇、二―〇、三%で、今後如何に増産しても、量が多い為に使用しきれぬ、と言うことは無い。

一九五五年度、日本産の生糸三〇万俵が、端境に、五千俵剰るかも知れぬ、と言うことは、生産量が多い為ではなく、値段の浮動が、激しいので、織屋が、生糸仕入後に、値下りによって、損をすることの心配から、生糸を買控えたり、人絹合繊等の、化学繊維、綿、毛等の天然繊維に比べて、値段が割高のためで、値段が、適正に割安で、価格に、変動が無いとなれば、現在の、三〇万俵が、一〇〇〇万俵になつても、全繊維生産量の一%にも達せぬ、微量であるから、消費に就ての、心配はいらぬ。

世界の生糸生産は、現在、日本が大部分を占め、中共、ソ連、アジア中近東、地中海沿岸、ブラジル等であるが、之等の農業地帯には、尚増産の余地がある。

最近五ヶ年計画によつて、農業共同化を、促進しつゝある、地域の農家にも、適当に技術指導して、養蚕を行えば、繭及生糸、更に絹の生産を為し得るものがある。之等の農家に養蚕を指導することは、農家の収入を増し、其国の、富を殖すことゝなり、農家には、今迄、夢にしか見られなかつた、生糸や、絹を、自らの手で生産し、更に、余裕あれば、之を自分の身に着ける幸福を得させ而も之等農民、及其地方に、絹に対する関心を深め、絹を、宣伝普及する結果となり、広く世界に絹を忘れ得ぬものとすることが出来る。

日本は、明治維新以来八十余年、蚕糸業に関する、学術が研究された結果、其進歩は、現在、世界第一である。又、蚕糸業の教育を受けた、学校講習所の卒業生も、年々数多く、社会に送り出されて居る。然し日本の国土、人口、食糧問題、耕地面積等から、現在の、桑園十八万町歩を、二十五万町歩に拡張することは、種々困難があり、今後、繭の増産は、専ら、反当収繭量の、増加に待つ外なく、日本蚕糸業拡大の余地は、殆ど、極限に近づきつゝある現状である。又学校講習所等の卒業生も、年々過剰気味で、其就職斡旋に、各当事者共、苦心惨胆たるものがある

更に、毎年蚕糸学会等で発表される、多数の研究業績も一層有効な利用の途を構じなければ、国費や精力の浪費となる状況である。

此の、学校教育を受けた技術者が、改良進歩した学術を身につけて、桑苗、蚕種、蚕具、簡易繰糸機等を携えアジア、中近東等、蚕業未開の、農業地帯に出掛け、蚕糸業を指導、宣伝、普及することは、指導を受ける国にも、日本にも、非常に有利である。又、同時に、之等地域の、国及民族を富し、蚕業を普及させ、絹を増産することは、人類社会に、富と幸福を、増させる結果となる。

然し、斯う言うと、之等後進国の進歩によつて、日本の蚕糸業が、滅亡すると考える人があるかも知れぬが、昨年(一九五五)国立蚕糸試験場長横山博士が調べた、レパノンの養蚕を見ても、丁度、日本の明治初期頃の、養蚕を彷彿させて居り、日本の蚕糸業に、比肩する迄には、相当の年月を、要すると思われるので、此の為に、日本の蚕業が亡びる、と考えることは杞憂に過ぎぬ。

それよりも、桑苗、蚕種、蚕具、簡易繰糸機等を携えて、敬養ある技術者が、アジア、中近東各国に、親切に、技術指導に出掛けることは、各民族から歓迎されると同時に、彼等に、日本国民を理解する、機会を与え、相互の親善友好を増し、日本民族の、世界各国への、平和的分散の契機、ともなることゝ信ずる。

此の意味に於て、アジア蚕業技術開発協会は、

一、アジア各国に対し、蚕業技術指導者の派遣、及斡旋

二、各国派遣蚕業技術指導者の訓練、養成

三、桑苗、蚕種、蚕具、簡易繰糸機等の輸出、及斡旋

四、各国との蚕糸業に関する科学技術の交流

五、各国政府、並当業者との連絡

六蚕糸業関係図書の蒐集、飜訳、出版

七、其の他、之に附帯する必要なる事項

等を行い、前記、趣旨の貫徹を図るものである。

會費領収

入会金納入者

宮尾三富統(蚕三八)
羽島　清人(紡大三)
池内　鼎(化大四)
樋口栄四郎(〃　)
小泉　直躬(糸大一)
水出　友雄(糸大四)
和田　義郎(〃　)
宇野　保夫(〃　)
関　弥三(〃　)
桜井　和一(紡大四)
上野　毎夫(〃　三)
西沢　茂久(化大四)

昭和三十年度会費納入者

西田　謙三(化　一)
松吉　博隆(蚕二五)
堀江　章(〃三二)
福島　虎(紡一六)
小林　憲三(〃一一)
伊藤　辰夫(〃二七)
中西　知三(化　五)
渡辺　孝治(〃　八)
小谷野信一(〃　六)
金井　弘(蚕別二)
林　宇一(糸一九)
吉沢　弥(蚕三六)
近藤　二郎(〃二三)
中村寿恵男(糸二二)
坂口　健男(蚕大一)
松本　武(蚕二二)
真木　元(〃一六)
小林　幌(蚕別二)
高橋　由三(蚕別三)
藪　一義(糸三〇)
門平潤一郎(蚕　九)
柳沢　新一(〃三一)
安達　弘信(蚕別二)
新井　露子(養　七)
宇治川喜平(蚕三三)
久根下栄一(蚕大一)
小林　恵吾(蚕別二)
滝沢　守男(糸大二)
滝沢　芳樹(糸一九)
町田　正直(蚕一四)
持田　正彦(蚕大三)
田中　泰久(蚕三〇)
宮尾三富統(蚕三八)
本内　更介(蚕三四)
武田　一好(〃一九)
井上　保雄(糸一五)
川久保卯人(蚕三六)
宮下　克己(糸三七)
篠原　宏(蚕三八)
山口　邦友(蚕大二)
塚田　修一(蚕三八)
雨宮　育造(糸三六)
小林　三郎(化　一)
関　光司(糸三七)
角田　幸雄(糸三八)
堀内　伝一(紡二八)
宮下文四郎(糸二〇)
渡辺　綱男(〃二三)
小山　祖光(糸一六)
上原　真徳(蚕二六)
永島　覚(糸一七)
岩佐　隆次(〃二九)
近藤　正行(紡二一)

(十一頁へ続く)

千曲会名簿発行

既に会報上で度々御通知したように会員名簿が完成しました。今回は今迄と全く変つた形式をとつて支会別にしましたので各位の御利用には非常に便利になりました。尚独立会計でやつている関係上発行部数が少ないですから、なるべく早く御申越し下さい。

記

一、頒布価格　金弐百五十円(但送料共)
一、代金は現金で手紙に同封して送れますから御利用願います。
一、宛名は千曲会名簿編集部宛として下さい。

千曲會名簿編集部

特集　佐藤利一　佐藤春太郎　両先生を送る

今回佐藤利一教授，佐藤春太郎教授は学部の停年制施行により，三月三十一日付を以つて御退官になられた。両先生は終始変らざる御心で，上田蚕糸専門学校・上田繊維専門学校・信州大学繊維学部の発展の為に寄与されその御功績は今更言をまたないものがある。今回の御退官に当り真に惜別の情にたえません。

※えがたく心から両先生の御勇退を惜しむものでここに今更ながらその御功績の大なるをしのびつつ，両先生の末長く益々御健康で御幸福であられることを全卒業生と共にお祈りして止まない次第である。

両佐藤先生の停年御退官を惜しむ

蒲生俊興

わが蚕糸学界に於て、蚕体病理学者として令名を馳せられた佐藤利一博士、遺伝学者殊に家蚕の単性生殖の研究者として名声嘖々たる佐藤春太郎博士の両教授が同時に、去る三月末日を以つて、停年御退官となられたことは、独りわが母校の一大損失であるばかりでなく、他面本邦蚕糸科学のために誠に痛恨の至りにたえません。

佐藤利一教授は大正二年いまの北海道大学農学部の前身たる東北帝大、農科大学を御卒業になられ、その後北大に御在職あらるゝこと約三ヶ年余の後、大正五年十一月に母校の講師として御来任あられ大正七年上田蚕糸専門学校教授に御昇任あられ、母校創立当時の碩学大森順造博士の後を受けて蚕体病理学や微生物学を担当せられ、現在に到る迄実に三十有九年四ヶ月という長い間、我国蚕病学の泰斗として、その教授と研究とに粉骨せられ、わが母校の名声のために多大の功績をのこされたことは誠に感激の至にたえません。

又佐藤春太郎教授は大正七年東京帝大、農科大学、を卒業せられ、直に、わが母校の講師として御来任あられ、翌八年同じく上田蚕専教授に昇任せられ遺伝学及動物学等を担当せられて、赫々たる御業績をのこされて今日に至り、この間実に三十有七年九ヶ月という長期間母校の発展のために尽瘁せられたことは我々の同様感激措く能わざる所であります。

両先生とも、昭和の初め頃夫々御専門学の研究のために独逸国へ二ヶ年間御留学あられ、又佐藤利一先生には去る昭和二六年大日本蚕糸会より蚕糸功績賞を授与せられ、又佐藤春太郎先生には昭和二五年日本蚕糸学会より蚕糸学賞を授与され今回更に目出度大日本蚕糸会蚕絲科学功績賞受賞者に擬せられて居り尚両先生共一昨年は実業教育七十年祝賀に際し目出度文部大臣より表彰せらるゝの光栄に浴され、御両先生共各御一門の栄誉のために誠に慶祝にたえない所であります。

両先生とも四十年に垂んとする長い間、母校草創の頃から初代校長針塚先生、二代井上先生、及現伊藤武男先生の歴代の校長及部長の下に或は養蚕学科々長（現在の主任）又は教務課長などの重職にあられ、殊に佐藤利一先生には和田大滝両先生御退官後は最右翼の教官として長い間、井上校長及伊藤部長を補佐し、殊に先般わが国の学制改革の際には、母校の単科大学昇格運動の陣頭に立たれて、吾々後輩を叱咤激励された涙ぐましい御努力は只管感激にたえない思出であります。

申す迄もなく母校の興隆と盛大を期するには第一に研究並に教育施設の拡充、第二に教授陣営の強化、第三に卒業生の就職と発展というこの三拍子がそろわねば出来ません。

之等の点から、わが学部は冷静に観て、信州大学各学部中、決して人後に落ちないものであることは衆目の一致する所であります。わが学部は大学昇格以来伊藤学部長を初め、両佐藤先生の良き碩学を筆頭に、多数の知名の教官を戴くことが地方新制大学として稀に見る存在と自他共に任ずる所となつているのであります。今や益々学園の拡充強化が要望される折柄両先生を送ることは誠に痛惜の極みであります。

母校創立以来四〇有六年間の星霜を閲し、この間たえず母校の発展と向上とを祈願してやまぬ数千の同窓魂よ、翼くば両佐藤先生ののこされた偉大なる御業績を嘉みし、須らく和衷協力せられて、今や母校を去らるゝ両先生に対し最大の感謝と敬意とを表されんことを。

なお此の稿を終るに際し両先生の益々御健康と御多幸とを祈り、我々四千有余の同窓に対し、いつもかわらぬ御教導を垂れ給われんことを切に御願い申上ぐる次第であります。

（養蚕学科主任教授）

◇　◇　◇　◇

停年の退職

佐藤利一

佐藤利一先生

私は只今六十八才でありますが昭和三十年度から実施の信州大学教官停年制（六十五才）に則り本年三月限り退職することになりました。顧みれば大正二年七月東北帝国大学農科大学を卒業して直ちに同大学実科講師として教鞭を採つたのを手始として爾来同大学助手、上田蚕糸専門学校講師、同教授、同校改名の上田繊維専門学校教授、更に改名の信州大学繊維学部教授等を歴任して教職に在ること四十三年の長きに達し退官に際して実に感慨無量のものがあります。

本学部の前身たる上田蚕糸専門学校に赴任したのは大正五年十一月であつたからもはや四十年の星霜を数え私の活動期の大部分を占めて居ります。教壇生活には未練がないがいざ校門を去ることになると惜別の情に堪えないものがあります。途中二三の転任口の誘惑はありましたが飽く迄「本校と共に」の主義を貫き任期終えて今日円満に勇退することの出来ましたことは本懐の至りであつてこれは畢竟本校歴代の校長、教職員、学生、卒業生等は勿論、更には各方面各位の御厚情に基くものと深く感銘して居ります。

在職中年々才々人同じからずで自分達の主宰する平和の学園に新入生を迎えては教育し、仕上げては之を社会へ送り出すことを繰返すこと四十数回、年毎に巣立つ教え子に大なる期待をかけながら社会における其活動、立身出世等を見守る愉快さは教職に在るものならでは味い得ぬ楽しみであります。其反面、教え子に関連して最も悲しい印象を残したものが一つあります。それは這般の大戦において学徒の出陣と卒業生との応召出征で生別死別を兼ねた教え子が数十名に達して居ることであります。

人誰か死なからんやで畳の上で病死するよりも一身を犠牲にして国難に殉ずる戦死が如何に壮烈崇高のものであるかは説明を要しませんが、人情の常として而も師弟の愛情として忍び難い痛恨事でありました。私は在職中幸に健康には最も恵まれ授業や研究に

は始終支障なきを得、尚自分の趣味のスポーツ、盆栽、家畜飼養等にも相当精進しよく遊びよく学ぶ主義を遺憾なく実行して来ました。結局それが健康の上にも亦能率増進の上にも大いに役立つたものと信じます。

私は本職の授業や学究の外に尚所謂準校務又は副校長の校友会、報国団、報国隊等の総務部長、本部長副隊長等の要職を歴任し生徒主事、教務課長、首席教授等の地位にあつて学校運営にも関与し、同僚中には全く類例のない程多種多様の足跡を残したが何一つ偉大な業績を残さなかつた事を恥ぢます。尚私の最も関係したことで印象に残つて居ることは終戦後における三繊維専門学校と三高等工業学校間の紡機の返還問題と本校の単科大学昇格運動とであります。其中紡機の返還問題は交渉が一時暗礁に乗上げたこともあつたが結局妥当と思われる線で解決出来ました。単科大学昇格運動の経緯はかつて私が昭和二十四年十月発行の千曲会報第三十九号に「上田繊維専門学校単科大学昇格運動の顚末」と題して寄稿したことがありますが要するに該運動は途中幾多の迂余曲折があつて難航に難航を続けながらも校内外関係者の必死の努力によつて着々奏功し最後にもう一息と云う所まで漕ぎつけたにも拘らず遂に所期の目的を達成し得なかつたことは私の責任でもあり唯一の心残りであります。一教授としてかうして多彩な行事に参画し又活潑な行動を敢えてしたことは一面犠牲的であり他面行過ぎであつて其結果本職の学業に尠なからぬ支障を生ずる程度のものであつた。

私は老齢で退官した者ではありますが依然として健康に恵まれ今後も尚相当働き得る余力を残して居ると信じますので所謂閑日月とか悠々自適とかの気楽な生活にはよらず寧ろ若返つて過去の体験を活かしながら奉仕的に生活し余生を最も有意義に送り度いと思います。私は郷里福島県下にも亦上田市内にも自分所有の住宅は持合せてないので何処で暮そうとも其の方面からの拘束はないが一身を捧げた本学部の所在地上田市内に引続き居住するつもりです。私は上田市生れの妻を娶り三男二女の父となりましたが其中四人は既に成人し末子が高校三年生ですから親としての責任は大体八割程度既に果たした勘定になりましよう。永年勤続した関係で老後の生活は細々ながらも保証されて居りますので何なり御役に立ち得ることは無報酬で奉仕し度いと思いますから何卒御利用下さい。

最後に親愛なる千曲会員各位の御健康と御発展とを祈り併せて今後共変らざる御交誼と御鞭撻とを偏に御願い申上げます。

（三一、四、一七）

◇　◇　◇

在職三十八年回顧の一こま

佐藤春太郎

佐藤春太郎先生

私は本年三月三十一日を以つて足かけ三十八年の教職生活を終えて退職した。三十八年と云えば人生の大半にわたる長い年月である。殊に私にとつては大正七年東京帝国大学農科大学（現東京大学農学部）卒業直後、当時上田蚕糸専門学校に奉職し、爾来上田繊維専門学校（昭和十九年改称）及信州大学繊維学部（昭和二十四年）を通して、校名は変れど一ヶ所に御厄介になつたのである。活動の時期を以つて人生とするならば私の人生はこの学校に始りこの学校で終つたのである。過去現在この学校に勤務され又勤めておられる方は多いが人生の始めから終りまで一ヶ所に勤めさせて戴いた者は蓋しその数は少いであろう。

私といえどもその間に私的に転出の招聘を受けたこともあつたが、第三高等学校時代の親友T君が上田中学校出身であつたので、上田の話を聞く機会が多く又この地は名将真田幸村の居城であつたのでなんとなく親しみを感じていた。上田に来て見ると小盆地に位する田舎的な落ちついた城下町であることが気に入つたので、将来ここでしんみりと研究に従事してみたいと決心したので、折角の招聘の好意も御断りしたことも再三あつた。又この一生一物主義は研究面にまで発展した。私の研究は「家蚕の人為的単性生殖」やこれと関連したものであつて、始めから終りまで継続していた。かつて文部省科学研究費の件で恩師K先生が来校された時にこの話をしたら「いかにも佐藤君らしい」と笑つておられた。

家蚕の人為的単性生殖の研究では若干の新事実を発見してこれを世界の遺伝学界に発表したこともある。この様に生涯一つのことのみを研究していたと云うことは、愚のことであつたかも知れない或はそうでなかつたかも知れない、よかつたか或は否やはわからないが、私はこれで満足している。

三十八年と云えば、考えようによつては長い期間である。この間私をして愉快に常に気持ちよく過ごさせて戴いたのは、初代校長針塚、二代井上及三代伊藤（現繊維学部長）の三先生を始めとし、教官各位の変らぬ温き御懇情と御指導、更に四千五百名の千曲会員各位の陽に陰に与えられた御援助の賜である。私は衷心からこれに感謝し併せてこの後も旧の如く御厚誼を賜るよう御願い致す次第であります

私の就職の時の思い出

大正七年農科大学の卒業直後であつた。園芸学講座の主任教授兼農場長で更に卒業生の就職を司つておられた農博原熙先生から、上田蚕糸専門学校の針塚校長が来学されるから農場官舎に来るようにとの連絡があつたので定刻参上したところ針塚先生が先に見えておられた。先生とは初対面であつた。原先生は二人で別室で話し合つた方がよいと云われたので、そのようにすると、針塚先生は「私の学校に来てもらい度いがいかゞでしようか、御願いしたいが」と慇懃をつくされた言葉には恐縮して、「私でよろしければどうぞ御願い致します」と御答えした。この間殆んど一瞬で私の就職は決定してしまつた。今でもその当時の模様や針塚先生の言葉が脳裡に残つている。原先生はもうすんだか早いねと驚いておられた様子も亦眼に見える様である後に聞けば講師で手当は年俸九〇〇円であつたと記憶するこれが私がこの学校における動きの始まりであつて、私の生涯の運命のスタートであつた。

針塚先生は学校出たての私が蚕のことを知らないと考えられてか、暫く国立蚕業試験場で蚕の勉強をしてこいとのことであつたので、その好意に甘えて早速同場に出向いた時の加賀山場長は「よく来た君のことは針塚君からきいておる云々」と直ちに宇田一博士（現明治大教授）に紹介され八年四月頃迄同博士の室に御厄介になつた。この間梅谷渡辺両博士、故勝木博士や故肥後生理部長にも大変御懇情を受けた。学校へ出勤したのは大正八年四月、同年十一月教授になつた。

学校の風物

私は散歩が好きで一つの趣味のようなものであつたので中食後は校内を歩き廻つた。このことは退職するまでつづいた。正門通りの両側、養蚕科の北側その他所々に植えられた桜或は農場の藤の花はその当時は上田の名所の一つとして数えられていた程であつて、年に一度は職員やその家族が集つて花見の会を催し又花を探ねる市民も多く見受けられた。移植した桜樹の寿命は十八年位ときくが一時上田の名所とうたわれた専門の桜も自然の理に抗し難く今はその面影もなくなつた。これに反して針塚先生外職員が原野から持ち帰つて植えられた櫻、欅、栗、或は柿の如き地味の樹木は鬱蒼と茂り或は美果を結んでいる、華やかな桜の短命なること地味な樹木の長命とを対照して何か考えさせられるところが多い。校庭から東北方、吾妻山、猫嶽の遠望又海岸的の風情を持つ東南方の眺めも亦捨て難いものがある。散歩の時には必ず眺め

たのである。

その後緑化委員会（委員長羽島先生）が出来て校内の美化が計画されて校庭は今や前とは異つた趣を呈する様になつたが、庭樹が若いので、美は美であるが、未だ幽邃さが現れていないことは甚だ惜しいことである。この後年月が経つに従つて校庭の風格も出来て来る暁には、その研究施設と勝れたる研究業績と共に繊維学部の名は世にうたわれることであろう。これを願つて止まない。

研究と図書館

教官の重要な職務は学生に対する教育と研究にあることは云うまでもない、立派な研究が出来れば講義が生き、学生の信頼も加わり、これはやがて教育効果を齎すことになるであろう。由来吾が校は専門学校及び繊維学部時代を通じて歴代の校長及び学部長は常に研究を奨励し又各教官は一意研究に精進して慈に世に誇る繊維学部の学風が育成されて来た。

研究論文は当人の専門的力量を表わすばかりでなく、後続研究者に対しては貴重な文献となるものであるから、確実なる研究資料のもとに、これに関連ある参考文献を広く引用しなければならない、例えば蚕の論文を書く際には単に蚕だけの文献ではもの足りない、他の幾多の昆虫類を始めとし場合によつては化学も物理も亦数学も必要となろう。

この要求を充すために充実せる図書館を持つことが第一条件である。図書分館長八木博士及図書委員一同はこれに向つて鋭意努力されて居るが未だ蔵書は三万冊を超えないと聞く、この後全職員は協力して充実した図書館を作り上げるのが緊急欠くべからざることゝ思う。図書館は研究の心臓であり源であるからである。又一方においては教官も亦学生も盛に図書館利用の気風を助長し、必要に応じて希望する図書は支障なく閲覧出来る様にしたいと望むものである。又その上に研究及び読書のための時間がほしい、今までの様では時が不足の嘆きが深い。会議のために費す時間が余りに多すぎる、これを何とか改良する道はないものであろうか。

学部の価値はその研究業績によつて定まると云うても過言ではない、その意味でよい業績を納め得れば待望の大学院の設置は、策を用いずとも我等の頭上に輝くであろう。急がばまわれである。

壮年研究者に

古い教官は早晩退職の時期が来るので現在の壮年教官はやがて当学部の重鎮となられるのである。万事に時期があるように研究にも時期があつて、うつかりすると自分の気づかないうちに、その研究の上に時代的ブレが現われて来るものである。

諸君は今にして一心不乱に研究勉学に努力しなければ切角の才能素質も光を発し得ないであろう。研究は大自然と取組んでの仕事というよりもむしろ大自然の中に没入してその真理を探求する仕事であるから、いさゝかも策意はあつてはいけないしいわゆる悪要領を使うことは最も忌むべきこととして自他共に誡めておるところである。話は別になるがこのいわゆる悪要領と云うことについて思い出すことは私が嘗て軍隊に居つた時に中隊長から志願兵一同に軍隊生活に対する感想を書けと云われ私は常に感じて居つた「軍隊における所謂要領」と云う題目で一文を草したことがあつた。（軍規の厳粛は見掛けのものでないか、真の軍規は正直の心から出発しなければならぬとの意であつた）、今にして思えば我が国の敗戦もこの軍隊内に充満した悪要領の結果が大いにあづかつたのではないかと思つている。話は余談に渡つたが研究会においても同様で所謂要領でまとめ上げた研究は後続研究者を誤り、のみならず事件に遭遇した時には直ちにその価値を失墜するであろう。くどい様であるが研究は真理の探究であるから、あくまで慎重に正直、たゆまず、成功をあせらず、且つ世におもねらずに続けて戴きたい、然る時は自然の結果として真の栄冠がその研究者の頭上に輝くであろう。

学科について

今や繊維学部は養蚕、製糸紡織及び繊維化学の四科と教養部等から成りてその職員組織、研究施設或は研究論文等においてはるかに他学部を圧しておる感があることはまことに慶賀にたえない次第である。たゞ私としては非常に残念なことは繊維農藥科の抹殺されたことである。

繊農は昭和十九年の設立であつて当時私は養蚕科長であつたが新設の同科に転じ、倉沢、斎藤、町田、川端、吉田半田、上原及故関根（大滝）の諸先生と共にその完成に力を尽くした（当時の職員及学生の辛酸は倉沢、町田及斎藤の先生方にお聞き下さればよく判る）従つて当時は五科であつたが敗戦後の学制改革の際に繊農がその設置も新しく且つ戦争の生産物と云うことで惜しくもその科名は抹殺されてしまつたのである。私達は自分達の産んで育てた繊農なるが故の惜しみ悲しむと云う私的感情ばかりでなく信州大学繊維学部の本来の使命と云う大所高所から見て、養蚕と繊農とをまとめて繊維農業科とし紡織と製糸を合せて繊維工学科としこれに化学を加えて三科案を主張したのであつたが時運至らなかつた為に現在の養蚕、製糸、紡織及化学の四学科となつた。その当時これについて色々と反省して見たが前述の三学科案が繊維学部の自然の姿を表わすもので恐らく将来私達の自論なる三学科案が再燃して来るものと考えられてならなかつたその後十年を経た今日果して私達の考え方が再び蘇つて来て居ると聞くことは何んとなく嬉しい気がする。

メンデルの言葉

Meine Zeit wird Schon Kommen とはメンデルが常に口にしていた言葉である。世の中に正しいことは真直ぐに通るようにしたいものであるが、そうはゆかない場合も亦少くない、しかし真理は必ず世に出るから敢えて悲観や落胆するには当らない。メンデルは一八六六年に始めて現今遺伝学の基礎をなす法則を発見したことは周知のことであるが、又その当時の学者には認められなかつたことも有名の話である。その他人種問題或は宗教家の財産に対する課税問題等の意見も政府には入れられなかつた。然るに一九〇〇年にメンデル法則の再発見があつてはじめて世に出て、一九一〇年には世界の科学者は氏の記念像をブルン市に建立し不滅不朽の偉業を称えている。私も嘗てこの僧院を訪れ又その大理石像にもまみえて敬意を表した。

Meine Zeit wird Schon Kommen実に含味すべき言葉である。

× ×

佐藤利一先生

古平福紀

三十九年四ヶ月の長い期間母校のため又蚕病学発展のため御尽力になられた先生が、この度停年により惜まれつ御退官になられてしまつた。

先生の御生家は福島で、蚕種製造業をやつておられたと承つている。先生は北大を御卒業後暫くの間その母校に於て農学の研究に従事しておられたが大正五年わが母校に御来任になり、蚕糸学研究の分野にお入りになつたが、やはり先生は幼少の頃から蚕とは深い御縁があつた事と思われる。

先生が蚕病学の研究に着手された当時は蚕病の中、軟化病が最も重要視され、まさに軟化病研究の最盛期を迎え様としている時であつたと思われる。従つて先生も軟化病の研究に没頭され、特に蚕の敗血症に関する研究は先生の御功績に負う所が多く且軟化病の研究に一新機軸を拓いたものと称せられている。

軟化病についての細菌学的研究は昭和七、八年頃を境として急激に衰弱の方向をたどつたが、最近に至り不結繭蚕の研究から軟化病蚕の中には中腸型多角体病と称するウイルス性新病蚕が多数見受けられる事が明らかとなり育蚕上又蚕病学上非常に重要視され今やこの研究分野は蚕病学の中心問題となりつつあり且つ又従来の軟化病の研究は再検討の必要に迫られている。こ

の時期に当り敗化病研究の泰斗として知られ、その蘊奥深き先生が御退官になられた事は誠に痛惜にたえない次第です。先生は又、在職期間中の後半に於ては数々の要職を歴任され、最高幹部として殆んど母校の行政面の仕事にたづさわつておられた。多分昭和十六年のはじめ頃であつたと思う。先生は養蚕科長から教務課長となられ所謂非常時下の学校運営に日夜全力を傾倒せられ、特に学生の体位向上には最大の努力をはらわれ率先陣頭にたち範をたれておられた。そう云えば先生が大のスポーツマンであつた事が思い出される。北大時代に於ても、又母校に来られてからも先生はテニスや卓球を非常に愛好されたと聞いている。

先生が齢まもなく七十になられようとする今日尚かくしやくとして壮者を凌ぐが如き元気をお持ちなのも、そして又殆んど病気をなさらないのも日頃のスポーツ愛好の賜と拝察される。

戦後も先生は引続き教務課長の重職を担われ混乱期に於ける学校運営を冷静沈着によく処理され、大学昇格後諸制度が改められるや佐藤春太郎先生と共に御退官になるまで補導委員と学科主任とを交々お務めになられ常に養蚕学科全職員の信頼と尊敬とを受けておられた。この間或は教官の資格審査委員として遠路いく度か新潟へ、或は又大学の評議員として松本へと寧日無き多忙な仕事にたづさわつておられた。殊に母校の単科大学昇格問題について先生は全く全精魂を傾けて奮斗せられた。先生は日頃清廉潔白、そして熟慮断行を最上のモットーとして且これを実行され而も断行と決めた上は飽くまで初志を貫徹せずんば止まない極めて鞏固な信念の持主であつた。この先生の御性格は単大昇格問題にも余す処なく発揮されており、母校の発展のためには職を賭しての覚悟で尽瘁されたが、大勢のおもむく処いかんともしがたく、ついに刀折れ矢つきたるがままに一応の終止符が打たれてしまつた。去る三月中旬母校職員により両佐藤先生の送別会が盛大裡に行われたが席上別離の御挨拶に於てもこの事が何よりの心残りとなつておられるかに拝聴せられた。御退官に際しさぞ感亦無量なるものと先生の胸中をお察し申し上げる次第である。しかし先生の残された足跡は母校の歴史の上に深く刻みこまれ永く後世に残る事であろう。

校務御多端の間におかれても先生は家庭にあつてはカナリヤ、兎、鶏、犬、モルモット等数々の動物を愛育されていた。そしてこれは単に趣味と云うよりもむしろ先生は本当に動物がお好きのための様であつた。餌等も先生御自身で与えられ、飼育上の些細な点についても最大の注意を払われ、これらの愛育した動物を他の人に頒けて上げることを非常に喜びとしておられた。かつて先生が留学される前に研究室の附近にいた野良猫に毎日御自分の弁当の一部を分け与え研究室でお飼いになられ、非常になついてしまつたと云う事を承つた事がある。留学のため出発に当つては故針塚先生に托してゆかれたとか、いかに先生が動物への愛情がこまやかであるかをうかがい知ることが出来よう。

又花卉栽培も大変お好きの様でかつてはラン、オモト、サツキ等を沢山作つておられたと承つているが、最近はダリヤを熱心にお作りになつておられた。毎年研究室の周囲にも先生自ら、球根を植えられた。晩秋の霜の時期まで赤黄、白、紫等色とりどりの花が鮮かに咲き乱れていた事を知る人も多いであろう。そしてその一株一株毎に必ず名札がつけられてをつたのも先生の几帳面な御性格がうかがわれよう。

謡曲も大分おやりであるとか。併し私はこの事については何も知らない。かつて養蚕学科の忘年会の席上先生は余芸としてビワ「石童丸」をうたわれた。切々とした哀調、そして美声と実感に満ちあふれた節々は、なみいる一同を暫し只爾然としてその境中に誘い入れた。蓋し人生の悲哀を乗りこえられた人の境地と云うべきか。

御趣味ともいうべきものごく一端のみを書き記したが先生は学問にせよ、校務にせよ、或は又スポーツ、趣味等にせよ何れの面に於てもその一つ一つに於て最も精通した者にならなければ止まないという非常に強い意欲をお持ちであつたようにうかがわれる。尚また先生は校務の外上田公民館運営審議委員定期講座部長として社会教育の面に於ても尽力しておられる。

御退官後は率仕的な生活を致したいとの御意向と承りましたが、御自愛の上永年の御経験を活かされ、今後も充分な御活躍をお願いする次第である。

佐藤春太郎先生のこと

田中茂光

此の度、春太郎先生が退官されにつき会報編集部から先生についての敢い記事を書けと言われた。甚だ僭越かも知れないがお引き受けした。春太郎先生は本校に来られてから三十八年になるそうである。をかしな言い方であるが私が生れるずつと前からの話であるからである。私はその終りの方の四分の一を当遺伝研究室において先生のもとで過したので、公的にも私的にもアッシスタントとしては最も長い期間先生と接したかも知れない。私が接したのは先生にとつてはまさに晩年で人間的には完成された後である青年の最も活躍された頃の姿は残念ながら想像しか得られない。今先生のもとに足を踏み入れた私の諸先輩に敬意を表してみると、先ず工藤与七郎先生（農大へ転勤現在は他へ）前宇都宮農高長高橋氾一先生、鐘紡蚕種製造所小林繁氏（死亡）、京都大学細胞遺伝の西山市三博士、須坂農高長若林茂一先生亡くなわれた前鹿児島高農教授中曽根長男氏、県蚕業試験物上田支場長井沢喜三氏、戦死なされた中沢二郎氏、農林省技官市原正治氏、上田蚕種協同社常務理事茅野功氏、岩村田高校教諭半田義雄氏、郡是研究所の目崎正夫氏、数年前亡くなられた渡辺一氏等々で相当の逸材ばかりである。

その他多数の諸氏が先生の薫陶を直接体得して夫々の分野で活躍しているのであるが一度先生の講義を聴いた事のある者は誰しも言葉に表わせない人格的魅力に惹かれたものである、それは底からにじみ出る真珠の輝きにもにていた。今学校を去るという段になるとみんなが直ちに心配されることは、それによつて母校の目方が軽くなつてしまう看板がはずされてしまうんじやないかと悲しがるかも知れないが、地球の廻転が止まらない限り、貴方々の子供が生長していく限り止むを得ないことで、先生もそれだけ年をとられてしまつたのである。

さてわたしに與えられた任務は学問的や研究業績のことは他に譲つて先生の私的な裏話を書けというわけであるから多少の無礼と名誉毀損はお許しを乞う次第である。

先生の教訓について……先生は強い性格の持ち主ではなかつたからクラークや針塚先生のような名訓を豪語しなかつた。総て無言の教訓とも言うべきもので、日常の先生の態度すなわち教訓であつた。その最たるものは謙譲の美であろう。先日の職員壮別会席上の挨拶に先生はこんなことを言われた。「……今日まで皆様の御厚情に甘えただけで全く何一つなし得なかつたが唯一つ自分は他人に迷惑をかけないことをモットーにしてきた……」、無言の教訓と強い信念が此の時始めて自ら公言されたような気がした。西洋に留学してあちらのエチケットに感銘して常にそのような意味のことを口にはしていたが、今時の社会にはいさゝかピントはずれな、実際通用価値の少ないものと思われるかもしれないが、先生の人柄はそうさせずにはおかなかつたであろう。又先生には東洋的道徳の片りんをものぞくことができる、卒業期の学生が良く色紙を持つてきて嫌がる先生に無理に書かせるのだが決つたように「和神養素」の四文字を書いてニヤ〳〵していた。どこから引張り出した

（蚕二九回卒　蚕体病理学研究室）

のか、正確な意味をも説明してくれない、曖昧鮮やかで日頃の字とは似ても似つかない遠雷である。K博士などに言わせると、掛軸にすれば大したものであるそうである。ついでにご紹介に及んだ次第。

先生の趣味と嗜好について……

……若い頃謡曲をやられたそうであるが私はたつた一度聞いただけである。或る宴会の席上三十秒程うなつた程度だが音調も良く極めてスムースであつたから昔は相当だつたと想像する。日常独りごとのように口ずさんでいたこともしば〳〵あつた。そんな時にはとても御気嫌を示したものだつた。釣の話が出ると同じものを何べんでも聞かされる一間巾位の小川の芝生に腰を下して半かんでも食べ乍らやる、いわゆるボッカン釣りというやつである。獲物は鯉魚場や田圃からの「逃げ出し」をねらうのがコツだという、先生の釣の話は何度聞いても面白い、釣られる魚もおのずから滑稽に見えてくるのである。それにしても近頃の川にはカワズ一匹探すのにも容易でない。世情の反映か、せちがらい世の中を先生もしきりと歎かれる。先生は又散歩が好きである、最近は専ら夕食後のひとゝき夜の街を一廻りするのだがどんな寒中でも欠かしたことがない程だ、夏の夜店など歩くのは殊に楽しそうだ健康に留意なさる点も感心させられる、好きな牛肉も冷んど控えめにしている、少々血圧ノイローゼ気味だが医者の忠告を守つておられるようだ飲む方も非常に謹んでおられる、それでも真夏の宵など静かな音楽を聞き乍らビールを味わう気分はいゝなあ、と言つた事もある。申し上げるまでもない話である。標準の好きなことは又有名である。五等分位にちぎつて絶えず象牙のパイプ（昔はキセル）と共にくわえているのは独特である。食べるものでは何といつても甘いものである。ロシアケーキ、和菓子、洋菓子その他糖度の順に従いケーキをみると顔の筋肉がたちどころに緩む位の甘党で、ひと頃は重曹を常備薬に携帯している程だつた。果物では柿、いちじくが大好きであられることはうなずける。

先生の家庭のこと……

……話が少々深入りしてしまつたのでちよつと触れてみると御家庭にはヒロインである奥さんがいる、気品の高いことと御夫婦の睦まじさは学内随一であつた。婦唱夫随の形態をとられていることはご承知の通り一時健康のすぐれなかつた奥さんも今ではすつかり丈夫になられてカナリアの飼育に大童である。研究的に育成して赤色系の立派なのを作り出して御満悦である。四、五十羽もいる一つ一つを玉のように可愛がつておられる姿は平和そのものです。採算は勿論問解出来ない部分が数多くありました。要所要所をしぼつて私達学生の為に老躯をむちうつて熱心に教えて下さる両先生の至純な高潔なそしてひたに先生始め吾々が多少労役に従つたものだつた。常緑樹、踏み石、垣根、玄関とまことに美と静寂に溢れる環境である。未だ訪問のなされない方は一度是非この楽園を見舞われることをお奨めする。退官後も当分ここで余生を送り尚研究も続けていかれる由である。吾々子弟としても何時までも上田におられるよう、そして先生の宅を訪ねる機会を唯一つの楽しみにしたいと願つて止まない次第である。終りに佐藤先生御夫妻の万寿を皆様と共にお祈り致して駄文を閉じます。（織農二回卒、遺伝学研究室）

両佐藤先生の印象

H・K

私達が佐藤春太郎先生の遺伝学、佐藤利一先生の微生物学及蚕体病理学の講義に直接接する様になつたのは、遺伝学及蚕体病理学の場合は三年の時であり、微生物の場合は二年の時であつたから佐藤利一先生からは二年越しであり、佐藤春太郎先生からは一年間だけであつた。もしまた先生が学校におられるならば今年は青種学の講義を教えて頂く訳であるが今はそうも行かない

この僅かな間に得た両先生の感化や印象が今も尚鮮明なそして新鮮な思い出として脳裡に浮んでくる。正直なところ道化役者にも似た貧しい内容の学生々活に終始した私には、両先生の講義の一分も隙も無い峻厳な内容に唯暗中模索の中に彷徨したことも屢々であり手した。端的に言えば理解出来ない部分が数多くありました。要所要所をしぼつて私達学生の為に老躯をむちうつて熱心に教えて下さる両先生の至純な高潔なそしてひたむきな情熱と迫力が、私達の惰弱倦怠的な悪癖をぬぐい去つてくれたのであつた。柔軟性にみちた遺伝学の講義又数的な厳密さを要する微生物学及蚕体病理学の講義から溢れ出る学生へのハーモニーが私達をいつもふくやかな雰囲気に包み、瞬時の辛さも苦悩も寂しさも夢想も消え去つてしまうのでした」。個別的に両先生のユーモアラスな一面をとり出して見ましよう。初めに遺伝学の佐藤先生の教壇に立つた時の姿を想起してみよう。講義の時々に見せるあのあどけない微笑、童心の笑みにも似た好々爺さんの表情であつた。深い洞察力と知性に閃く顔に無数の皺がくつきりと浮んでくるのでした。今しがた迄あつた学者としての権威に充ちた峻烈な眼光は消えてしまつて、愛敬のある態度を見せるのも屢々であつたそしてしなびた唇からチョークを〳〵覗く小さな舌が静かに上唇をうるおして、又静かに引込んでしまうのであつた。そんな時今迄桃源境の夢の中にも遊んでいた御人は再び現実にとり戻されてそして誰れの顔にも何んとも言えない微笑がのりうつつてくるのであつた。あの甘美な教室での一瞬の雰囲気は私達を又新鮮な気分の中にひき込んで行くのであつた、そして時々コツ〳〵といつもの柔らかなひゞきをふるわせて黒板に走つて行くチョークの先から描き出される複雑な模式図に眼を落すのであつた。先生の話すことは又書くことはノートをとるといつた悠長なものではなかつた様である。黒板にあちこちと書きしるされた内容の中に先生の微妙な表現と相まつて私達の思考力―貧しいが―を卒直に促すものであつた様です。記述科学部門の一分科としての遺伝学、思えば難かしい学問であつた。

次に佐藤利一先生に焦点を合わせて見よう。佐藤先生からは前述の様に二科目に亘つて講義して頂いたが試験の時はいつもキリキリ舞をさせられたものでした。一見懇切丁寧を極めた講義ではあつたがあの緻密なしかも病理学独得の言葉を記憶するのに手をやいたものでした。例えば菌の培養基の製法など、ノート一冊分にも亘る多量な連続に時にはノイローゼにとりつかれた様な精神症状を呈したことも私だけではなかつたことでしよう。それでも先生は単位をくれた。そんな時私は無性に嬉しくなつた。学校の片偶にやつとこ生きさせて貰つている私の本心でもありました人一倍滑らかな頭しか有しない人間がかくも緻密な学問の一端に触れさせて頂いた事は本当に仕合せなことであつたと思います。ノッペラ棒の様な脳の表面にもかすかに刻まれた一筋の皺を感じとることが出来ました。自転車に乗つていつも校門をくゞつていた先生、そしてその後にはきつといつも変らない簡の器がのつかつていた。その中に生き物を愛するほのかな感性がにじみ出ていた。先生の性格を代表するものは丁寧さであり、規律的な面であつた。又一定の速さをもつて流れ行く言葉であつた。英語、ドイツ語、フランス語、時には中国語さえも織り混ぜた種々様々な外国語が黒板に一杯になつたこともまだ記憶に生々しい。先生のフランスでのお話を聞くのも又たのしい一時でもあつた。

この両先生の講義からにじみ出る様々のニュアンスがどれ程か私達学生の間に種々様々なインプレッションを与えたことでありましよう。その得た感化は個々別々の内容を帯びたものであるにしてもある一定の又普遍的なものが流れているに違いない、学問と真理探求の崇高な理念にその余生を傾注した両先生の人格と、その高貴な理念から導かれた感激は、きつと共通なものであつたに違いない。

先生と別れるに及んで蚕糸業を支えて来た二人の巨星が

我々の学部から失りことに一抹の寂しさを禁じ得ないが、又一面蚕糸業のダイナミックな飛躍性を、素晴らしい可能性を見出して行く布石として私達の中に豊かなる合理性を育くんで下さる事でしよう。

（蚕糸学科四年生）

両先生退官記念資金募集

母校佐藤利一教授並びに佐藤幸太郎教授には別項記事の通り今年三月末日付で御退官遊ばされました。両先生にはともに上田蚕絲専門学校時代から信州大学繊維学部の今日にいたる迄四十年間の長きに亘り母校はもとより広く学会教育及産業界において尽瘁せられた所少からず、その御功績は実に偉大なものがありまして、この度の御勇退は真に惜別の情にたえないところであります。つきましては、有志相はかり、こゝに両先生退官記念会を組織し、記念品を贈呈し、聊か謝恩の微意を表したい次第であります。千曲会員各位には右趣旨御賛同の上、応分の御拠出をたまわりますよう御願い申上げます。尚最寄りにおいて御集金願われれば一層幸に存じます。

◇醸金要領

一、醸出金　一口二百円
　口数は自由、必ず両先生別に明記

二、送金宛先　当学部千曲会内佐藤両先生退官記念会（振替口座東京四三三四一又は長野六三四三）

三、締切　昭和三十一年六月三十日

四、其他　記念品又は資金の贈呈方法は発記人にお任せ下さい。

四月二十五日

佐藤（利）教授並佐藤（幸）教授退官記念会発起人代表
蒲生　俊興

発記人氏名（順不同）

伊藤　武男　市川　信一
大平　敏彦　町田　博
柳沢　延房　荒木　喬
矢木　博　大山　融
斎藤　実　坂口　育三
武田　晃　関　博夫
林　貞三　母袋忠三門
土屋茂一郎　横沢　正雄
小宮山太助　秋山　利夫
野口新太郎　戸塚　一
荻原　清治　清水　良一
和田　晋　竹田　寛
笠原　正巳　有川　博
小林　運美　小山　長雄
中島　暹　工藤　栄次
北条　舜正　松尾　卓見
蒲生　俊興　松林　元一
松村　季美　古平　福紀
唐沢　正平　勝又　藤夫
倉沢　美徳　田中　一行
八木　誠政　岸　勝弥
白沢　幹　船田　敏夫
猪坂　直一　清水　猛
桜井　吉利　斎藤　義臣
中田　太郎　宮下　久吉
橋本　武光　中原　武
永田　平　坂口　文吾
金崎　真英　高橋　保雄
西山　市三　桜井　芳雄
尾藤　省三　柳沢　幸雄
角田又十郎　西山　久雄　山崎　寿
富田　治彌　市川　文夫　降旗　孝　斎藤　芳夫
中島　茂　西村　薫次　山本友之亟　三谷　敏夫
宮崎　邦雄　下川　又敬　井沢　喜三　安達　弘雄
山口定次郎　飯島　祐介　藤本衛佐雄　中村　治雄
若林　茂一　降旗　剛寛　田口　亮平　中島　福雄
武本　木治　大槻　英雄　北条五郎三門　茅野　覚
宮城　博　宮下　敏男　細川　敏雄　上原　芳友
竹内　善吾　田中　茂光　中沢　喜雄　茅野　功
寺田　良　掛　久雄

千曲会に望む
眞の親心をもて

和田　良央

四年間の大学生活と一年間の専攻科生活の計五年間の学校生活を終了して曲りなりにも同窓会つまり千曲会の一会員となり得るのであるが、ここで一つ気のつく事は、どこの学校の同窓会でもそうであるが、殊にこの千曲会にはかなりの〝大きな力〟が在ると云う事です。この〝大きな力〟と云うものがなか〳〵の曲物で毒にもなれば又絶大なる効力を有する薬にもなるのである。だが一旦毒に変じた場の時には自家中毒と云つたら良いか、そこに生じた毒素の為に患部が生じ、又その患部から毒が生じて来ると云う悪循環を生じ、ついに隔離病院にでも打ち込まざるを得ない様になつてしまう。そして同窓会のみから認められて社会、学界よりまつたく沈澱したものになつてしまうのである。

この様に毒薬になる時の事はさておき、良薬になる時の事について次の様な事を望みたいのです。

それは当り前のことではありますが〝真の親心〟で学部の発展の為に望みたいと云う事です、〝真の親心〟と云うものは子供を持たれた方ならば、又例へ持たれない方でも自分の親を見る時にはおのずから解るものですが、唯子供の正しい、完全なる成長、発育のみを念願して時としてはその為に自己を犠牲にすらする事を辞さないものです。決して子供をダシに使つて自己を宣伝しようとする人も無し又子供を踏台にして自己を延ばそうとする人も居ないのです。いわんや子供を喰物とする人は無いのです。例えいたとすれば、それこそもつとも世の中で最劣なる人間で世の笑者になるだけではすまされないものです。しかしこれは子供の場合には無いはずのものが他のもつと純正な気持で行わねばならないものに対してそれを喰物にしている場合のあまりにも多く有り過ぎる様に思われるがはたして一新卒業生の偏見であろうか。

又一度子供が病気等になつた時の事を考えると、その手当をする時いくら痛がつてもそれにかまわず手当をしますこれも大局的に子供の為を思つての事です。大愛の為に小愛をすてたのです。この様にして同窓会の先輩諸氏は子供さんを育てられ又将来育てられるのです。これは疑う余地が無いと思います。

当学部の発展の為にこの様な心がけで進みたいと念願するのです。――当り前の事だ前からそうして居るとこれをお読みになつた方は云われるかも知れませんが、そうなら大変に結構な事でありますし又ぜひそうあらねばならない事です。――この事柄は学部の発展、改革につまり改善にぜひ必要な事と思います。

殊に、何事によらず学部の真の発展の為に好ましくない部分を切り取り、そうして良いものをその部分へ入れる時はかなりの苦痛が伴うものですが、それにかまわずどんどん手術は続けられねばなりません。

しかし、この好ましからざる云々の判定にかなりの困難さのある事はたしかですが、又この時も変な義理人情と云う様なものはまつたく捨てられねばならないのです。唯単に学部の絶対的価値増加のみをねらわねばならないのです

又学部発展の為につくす事としては唯単に物品的云々のみを意味するものでも無いのです。勿論物品的に恵まれれば恵まれる程良いわけですがもつと根本的なものが存在すると思います。そしてそのものが充分学部発展の為に用いられたらと思うのです。

新たに一卒業生として社会へ出るに当つて以上の様な事柄を真然と考え、一生を通じて少しでも学部発展の為に微力を捧げたいと思い同窓会なる千曲会にはなはだ出すぎた事ながら望むものです。

（大化三回卒日新化工勤務）

×　×

就職のこと

宮澤　喜久男

新しい千曲会の会員として私はこの四月から入会することになつた。

そこで、新会員として千曲会に何を望むか？　と聞われたわけであるが、それかと云つて、何と答えるべきかもわからないと云うのが本音でもある。

しかし、それでは新しい会

員として余りにも情けないことのようにも思えるので、思いついたことを記してみる。

千曲会は、聞くところによれば、同窓相互の親ぼくを計るのが目的だそうであるが、年二百円の会費を徴収し、更に近く東京に連絡事務所を設け、会報も発行回数が増えるとか、これら一連の活動は、どうも親ぼくだけを目的としたものではなく、ほかに異つた意図があるように思える。

それについては、よく私達も聞いて来ており、また身をもつて体験しつつある卒業生の就職の問題が大きいと云われる。

千曲会は親ぼくよりも、むしろ卒業生の就職あつせん機関としての色彩の方が強いのかも知れない。

そこで私が、千曲会に望みたいことは、会員相互が学閥意識に集中して、徹底した卒業生の就職あつせん機関になつてもらいたい、と云うことである。

戦後財閥、学閥の弊害を理由に、その解体と閥の意識の解消とが叫ばれて来た。これはもつともなことで本来閥の意識は、小さい視野の中に同門同窓が集合して、他を排せきして牙城を守つて来たもので、決して望ましいものではなかつた。

しかしながら、衣食足りて礼節を知る。と云われるごとく、現在のように就職が困難を極め、学士である高級ルンペンが溢れている時代に、そんなことを云つておれば、自ら破滅の道をたどるに過ぎない。

その上大学の魅力が、就職のよい大学と云う条件つきである現在、優れた学生を集め学校そのものの質を向上させるためにも、大学当局及びその関連機関（例えば千曲会のような）がその方向に活躍することが必要である。

したがつて本来学閥がよいものとは思えないが、こうした条件の中では、私はそれに徹底しろと云いたいのである

新卒として、身をもつてこの苦汁をなめた私は、千曲会に斯く望みたい。

世の中が安定し、職の心配がなくなり、学生が大学を出ることを、就職のための条件もしくは就職を学校に期待しなくともよいような社会が出来あがるまでは。（大蚕四回卒）

特別活動資金
御寄附者について

先般会員の就職斡旋を主目標とする本会特別活動資金募集につき御援助方お願い申し上げましたところ、早速御賛同御醵出下さいました方々は左記の通りでありまして、厚く御礼申し上げる次第であります。

記

金参千円也　富田庄三郎(糸8)
　　佐藤色太郎(蚕2)
　　安田　けい(旧教)
金参百円也　小林　茂(蚕26)
金壱千円也石倉新十郎(旧職)
金壱千弐百円也松沢　栄(紡12)
金壱千五百円也山村洋介(糸22)
金弐千八百円也花房清一(紡11)
金五百円也　藤沢　豊(蚕27)
金参百円也　竹内与一(農3)
金参千円也　根岸貝吉(紡4)
金参百円也　清水徹敏(蚕11)
金六百円也　橋本亘司(蚕17)
金壱千弐百円也
金参百円也　関文夫(学糸2)
金八百円也黒田誠一郎(糸8)
金参百円也　日向　弘(紡28)
金四百五拾円也
金六百円也　荒木　栄(糸29)
金参百円也　田島政三(蚕31)
　　小川正夫(蚕専)
　　脇川　準(農2)
金壱千五百円也
　　山岸松治(糸3)
金参百円也宮川英一(学蚕3)
金九百円也　湯浅文雄(糸17)
金参百円也　稲石佐一(蚕3)
金壱千弐百円也
　　藤本　斉(紡8)
金九百円也　今吉樂則(紡5)
金参百円也細田栄一(学糸3)
　　石井　勝(蚕36)
金六百円也　中村長章(紡26)
金九百円也　市川信一(蚕20)
金参百円也　河辺荘六(紡27)
金壱千弐百円也
　　馬場長市(糸16)
金六百円也　重田正喜(糸26)
金六百五拾円也永井　寛(旧職)
金壱千円也　秋山武郎(糸19)
　　中村春彦(化9)
金壱千五百円也
　　江野村一雄(紡7)
金参千円也　蒲生俊興(蚕1)
金壱千五百円也
　　田口亮平(蚕17)
　　山口定次郎(蚕12)
金六百円也　竹田　寛(蚕25)
　　松尾卓見(蚕28)
　　古平福紀(蚕29)
　　清水　猛(蚕31)
金参百円也
　　田中茂光(農2)
　　田中一行(蚕35)
　　桜井善雄(蚕35)
　　西山久雄(蚕36)
　　西村善次(蚕38)
金弐千百円也倉沢美徳(蚕2)
金九百円也　町田　博(蚕21)
　　関　博夫(蚕23)
金参百円也　柳沢幸雄(農4)
　　押金健吾(蚕36)
　　矢彦沢清充(学化1)
金参千円也
　　林　貞三(糸3)
金壱千五百円也
　　荻原清治(糸12)
金九百円也　白井美明(糸20)
金六百円也　石川　博(糸32)
　　青沼　茂(糸33)
金参百円也　堀内　波(旧教)
　　柳沢蓮子(養6)
金壱千八百円也
　　野口新太郎(紡2)
金九百円也　小林尚一(紡8)
金参百円也　土屋幾雄(紡26)
　　美斉津利正(紡専)
　　松橋房江(学紡2)
　　篠原　昭(学糸2)
　　小山　定(糸別2)
　　下川又敬(学蚕1)
金九百円也　坂口育三(蚕22)
金参百円也　三石　賢(化9)
　　今井甲子男(化4)
　　木藤半平(化4)
　　池田忠夫(化6)
　　清水　周(化9)
　　山崎雷録(糸19)
金参百円也　中原　武(蚕33)
金弐千百円也八木誠政(蚕3)
金六百円也　小山長雄(蚕26)
金壱千弐百円也
　　須田圭二(蚕2)
　　中島　暹(糸16)
金参百円也一ノ瀬匡興(紡26)
金六百円也　吉野健吉(蚕4)

原稿に就ての御願い

千曲会報編集部理事　田口亮平

千曲会報が会員相互の連絡を強化し、会の運営発展の推進力となるという使命を果す為には、どうしてもその記事の内容の充実と発行回数の増加を図らねばなりません。私共編集部一同はこの目的達成の為に及ばずながら努力を続けて参りまして、発行回数も前回発行の五四号以後毎月一回を目標としております。

会の皆様におかれましては会報は皆様御自身の機関誌でありますので、どうか多数の方が御寄稿下さいます様切に御願い申し上げます。

原稿の内容につきましては

一、千曲会の発展に役立つ建設的な意見。

二、会員相互の親睦をはかる記事。

三、本部及各支部の情報交換

という様な内容のものを希望いたします。極端に思想的、政治的に亘つた記事は望ましくないように思われます。

また余り個人的な問題にふれたものは、会員相互のみでなく一般に広く公開される性質のものですから色々の面に迷惑を及ぼす場合も起り得ると考えられますし、また実際にこの様なこともありましたので、今後は極力さけたいと思います。

尚第三種郵便物の認可をとる必要もありますのでなるべく繊維産業に関する論文、総説、ニュース等も御寄稿下さい。

寄稿者には記念として、千曲会の名入の手拭を贈呈することにしております。論文、総説等に就いては別刷を作ることも考慮中であります。

学内人事

退職

佐藤　利一教授
佐藤春太郎教授

新任

長島栄一講師（遺傳学担当）
横山滋講師（ドイツ語担当）

轉任

西沢一俊教授（東京教育大学理学部へ）
朝倉保平助教授（金沢大学法文理学部へ）

昇任

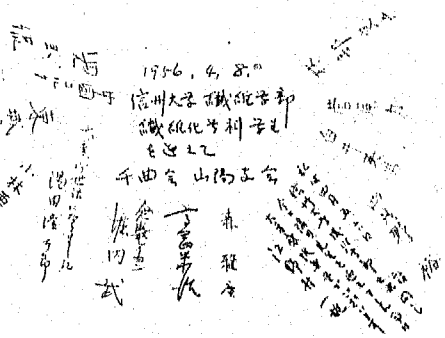
蓮藤恒久講師（一月十六日付で講師に昇任される）

山陽支会の皆様へ

隅田隆太郎

繊維化学科四回生の工場見学旅行は、江野村様の御骨折で三井造船玉野工場迄足をのばしました。四月八日（日曜）にはやはり江野村様に御案内頂き、倉敷の大原美術館、民芸館を見学して感激を新に致しました。その晩山陽支会の御好意で雨の岡山で懇親会が開かれました。非常に和かな楽しい晩餐で、学生連も先輩の方から御意見其他経験を聞かせて頂いて大変有益であったと喜んでいます。寄せ書はその時のものです。

千曲会の種々の問題もこういう所からスムースに解ける事と確信致します。最後に此の紙面をお借りして山陽支会の御皆様にお礼申上ます。



樋田　高久（蚕三七）
中島　章夫（蚕大三）
中村　守太（糸一七）
上原　泰正（蚕三三）
黒子　浩（〃三一）
千島宇亀夫（紡二二）
熊谷省次郎（糸三八）
橋本　孝一（〃三三）
柄沢　俊信（化　二）
山口　高志（紡二七）
岡田　康三（糸　三）
阿武　忠雄（蚕二八）

藤田　清司（化　一）
牧野　春雄（糸一〇）
高橋　裕（蚕三五）
小林　武俊（蚕大一）
内藤　久男（糸三四）
樫山　幹男（糸三五）
高見沢久一（蚕三三）
内藤　善永（農　五）
渡辺　義人（蚕三一）
中村　新治（糸大二）
小泉　直躬（〃　一）
近藤　義和（化大一）

船後　勇平（蚕　六）
寺島　雅彦（蚕一三）
生天目久平（蚕二五）
米川　富秀（〃三〇）
影山　剛（〃三三）
大工原　卓（〃三六）
宮崎　貞吉（糸三八）
永井　深郎（化　四）
田口　博輔（蚕　四）
牛田虎一郎（〃一〇）
岩根　謙（〃一七）
太田　康代（〃一三）
水野　広（〃一三）
市川　信一（〃二〇）
鈴木　彦佐（〃二六）
山岸　保男（〃二九）
桑島新一郎（〃三一）
中里見友一郎（蚕大一）
小山　清（糸一一）
土屋　孝（糸一五）
岡田　広太（糸一七）
岡部伝一郎（〃三五）
小山　清一（〃三六）
萩原　隆夫（〃三七）
小林　主亘（紡二二）
岩井　実（〃二三）
西原　美登（糸二四）
橋本　亘司（蚕一七）
日向　弘（紡二八）
中村　長章（〃二〇）
上野　毎夫（紡大三）

昭和三十一年度会費

小口　良人（農　一）
高野　憲三（蚕二六）
今井　喜八（〃二九）
大塚　重蔵（糸　九）
倉橋　琢而（〃一〇）
森西　康充（〃二二）
井立喜三郎（〃一三）
叶沢　納一（〃一七）
望月　弘（〃一八）
土居　芳樹（〃二七）
丸田　節夫（〃三八）

田中　実（糸大一）
田中　重臣（〃　二）
畠本　礼一（紡二四）
佐藤　正明（〃二八）
小林　英夫（紡大二）
中西　知三（化　五）
渡辺　孝治（化　八）
山口　高志（紡二七）
近藤　義和（化大一）
丸山　十吉（蚕一二）
東家　明秀（糸一九）
日向　弘（紡二八）
関　文夫（糸大二）
小泉　直躬（〃　一）
黒田誠一郎（〃一八）
野島　忠義（〃二七）
稲石　佐一（蚕　三）
池内　鼎（化大四）
水出　友雄（糸大四）
和田　義郎（糸大四）
桜井　和一（紡大四）
宇野　保夫（糸大四）
西沢　茂久（化大四）
青木　良三（蚕別五）
石島　泰（〃）
市瀬　有三（〃）
上原　芳友（〃）
梅沢　光祐（〃）
上原　忍（〃）
太田　宏一（〃）
大矢　宏（〃）
小川　保治（〃）
落合　潤（〃）
尾和　栄三（〃）
神取　章（〃）
高橋　広次（〃）
中山　良一（〃）
名取賢治郎（〃）
細谷　竜鳳（〃）
保屋野美智子（〃）
松本　守人（〃）
山岸　武（〃）

小林　照明（〃）
山崎文西郎（〃）
高橋　重保（〃）
桜井　秀男（〃）
関　弥三（〃）
柳沢　敬子（糸別五）
山極　功（〃）
中村　幸子（〃）
武田久米子（〃）
池田千代子（〃）
玉井　陸（〃）
飯島　京子（〃）
田中　客子（〃）

昭和三十二年度会費

稲石　佐一（糸大二）

未納会費納入者

金壱千百円也

滝沢　芳樹（糸一九）

町田　正直（蚕一四）
武田　一好（〃一九）
川久保卯人（蚕二六）
小林　三郎（化　一）
堀内　伝一（紡一九）
近藤　正行（紡二一）
千島宇亀夫（〃二二）
岩根　恒徳（糸一三）
上田　正三（紡一五）
岡田　康三（糸　三）
阿武　忠雄（蚕二八）
藤田　清司（化　一）
樫山　幹男（糸三五）
高見沢久一（蚕二三）
大谷　勇（糸　九）

金壱千円也

高野　憲三（蚕二六）
小谷野信一（化　六）
藪　一義（糸三〇）

農学博士　木摹　槇太　監修
中川房江・清水正德・鈴木三郎　共著
荻原清治・松本　介・保科　侑

生糸の品質と織物

A5判・530頁・布製函入　定価 800円　〒 50円
――関係技術者・研究者・学生等絶対必携の書！――

主要目次：　第1篇製糸と生糸の品質　1章蚕繭の理化学的性質　2章繭の保全方法と繭質　3章製糸用水　4章煮繭と生糸の品質　5章繰糸と生糸の品質　6章生糸の整理および仕上と生糸の品質　7章特殊生糸の製糸と糸質　文献　第2篇蚕糸の理化学的性質ならびに加工による性質の変化　1章蚕糸の化学的組成ならびに微細構造　2章蚕糸(絹)の物理学的性質　3章生糸の加工による糸質の変化　文献　第3篇生糸(絹繊維)の化学的処理と糸質　1章生糸の化学処理の意義および目的　2章化学処理剤の分類および性質　3章化学処理剤の使用方法　4章化学的処理による生糸および織物の諸性質の変化　文献　第4篇生糸品質と織物　1章絹織物とその種類　2章絹織物の製造と湿度　3章生糸品質に起因する織物の欠点　4章製織準備　5章絹撚糸　6章製織と織性　7章精練漂白および仕上げと織性　8章生糸の性質と織物の品質　文献

東京・港・赤坂溜池5　振替東京10番　技報堂

宮下　克巳（糸二七）
雨宮　育造（〃三六）
大森　武（農　二）
大西　三郎（蚕二七）
田島　政三（〃三一）
今吉　藤郎（紡　五）
井野　正夫（糸一八）
竹内万二郎（〃一六）
西原　美登（糸二四）
北沢　泉（〃二五）

金八百円也
林　宇一（糸一九）
吉沢　弥（蚕三六）
近藤　三郎（〃二三）
門平潤一郎（〃　九）
柳沢　新一（〃三一）
篠原　宏（〃三八）
関　光司（糸三七）
小山　祖光（〃一六）
樋田　高久（蚕三七）
上原　泰正（〃三三）
熊谷省次郎（糸三八）
柄沢　俊信（化　二）
高橋　裕（蚕三五）
船後　勇平（蚕　六）
寺島　雅彦（〃一三）
前沢　康雄（蚕一四）
生天目久平（〃二五）
米川　富康（〃三三）
宮崎　貞吉（糸三八）

金七百八拾円也
渡辺　義人（蚕三一）

金七百円也
渡辺　綱男（糸二三）
堀川　収（蚕二〇）
彭山　剛（〃三三）

金六百円也
中村寿恵男（糸二二）
宮下元四郎（糸二〇）
山口　高志（紡二七）
永井　保郎（化　四）
稲石　佐一（蚕　三）

金五百円也
小川　正夫（蚕　専）
橋本　広（〃　六）

金四百五拾円也
河辺　荘六（紡二七）

金四百五円也
森　せつ子（教　五）

金四百円也
西田　謙三（化　一）
金井　弘（蚕別二）
坂口　健男（蚕大一）
真木　元（蚕一六）
吉野　健吉（蚕　四）
小林　幌（蚕別二）
稲垣文一郎（糸二三）
安達　弘信（蚕別二）
小林　恵吾（〃　）
井上　保雄（糸一五）
角田　幸雄（〃三八）
橋本　孝一（〃三三）
秋山武一郎（〃一九）
内藤　善永（農　五）
日向　弘（紡二八）
小泉　直明（糸大一）
野島　忠義（糸二七）

金参百円也
宮尾三富統（蚕三八）
内藤　久男（糸二四）

金弐百円也
伊藤　辰夫（紡二七）
中西　知三（化　五）
渡辺　孝治（〃　八）
高橋　由三（蚕別三）
宇治川喜平（蚕三三）
久根下栄一（蚕大一）
滝沢　守男（糸大二）
木内　更介（蚕三四）
山口　邦友（蚕大二）
永島　覚（糸一七）
岩佐　隆次（〃二九）
中村　守太（〃一七）
中村新治郎（糸大二）
大工原　卓（糸三六）

手塚　輝夫（蚕大二）
田口　博輔（蚕　四）
岡部伝一郎（糸三五）
新野　武男（〃二一）
清水　衛敏（蚕一一）
上原　安信（糸別三）
滝沢　通（紡一六）
三沢　譲（糸二四）
村上　広之（〃三四）
羽田　満（〃二〇）
福地　進（蚕二〇）
久保田　信（〃三三）
外山　善臣（化　五）
松村初太郎（蚕　専）
向井　昭郎（農　二）
鈴木　行徳（糸大一）
岡村　源一（糸　六）
吉沢　英三（糸三三）
中島　茂（蚕一一）

金百円也
田中　泰久（蚕三〇）
近藤　正巳（〃　三）

金六百参拾円也
大鶴　昭（紡二六）

四百円也
小口トヨ子（教一〇）

昭和三十一年度会費
清水　洸（蚕二〇）
横内和多良（糸大四）
石坂　裕弘（糸　五）
戸田　耕三（糸　七）
山岡　弘武（蚕三七）
工藤　敦男（化　九）
大曽　政平（糸　二）
大沢　宝市（蚕一六）
清水　三郎（紡大三）
田中　秀幸（紡大一）

昭和三十・三十一年度会費
永井　覚（旧職）

昭和三十一年～三十年度分会費
山岸　松次（糸　三）

住所移動

頁	氏名	卒業回数	新住所
一七	井上　大	紡二一	大日本紡績岐阜工場（岐阜市鏡町）
一九	田村　義隆	化　六	勤務地前通り（知田郡八幡村田淵）
一九	都築　礼二	蚕　三	退職　額田郡幸田町菱池
一九	平野　秀男	蚕一五	自営　安城市安城北明治
一七	大井　学	蚕　六	亀山製絲室山工場（鈴鹿市飯能町）
二四	矢口　茂人	化　七	室谷染色工業KK（京都市中京区千本松原）
二五	猪原　良芳	絲二二	倉敷レイヨン株式会社合成部（大阪市北区梅田）
二四	秋山武一郎	絲一九	兵庫県尼ヶ崎市三反田千歳
二四	磯野　英一	絲一七	郡是製絲津山工場（津山市二宮二二〇〇社宅）
			日本レイヨン高梁製絲工場（岡山県高梁市松山一二一二）
二七	宮崎　貞堯	絲二九	異市西辰川町一七五
二三	青木　静志	蚕一四	死亡
二四	黒岩　君雄	絲二四	香川県大川郡長尾町清水
二四	芦谷　哲郎	紡一四	東洋レーヨン株式会社愛媛工場（伊予郡松前町社宅）
二七	城口　俊明	蚕三三後	郡是製絲川田乾繭場（麻植郡山川町川田）
二六	中島　藤治	蚕二七	履物問屋（呉市東雲町二の四）
		絲二六	インターナショナルインスペクションアンドテステイングコーポレーション（千代田区永田町一ノ一四）
二九	五十嵐邦久	蚕三八	世田ケ谷区赤提町一の二八〇
二六	塚田　照也	蚕三八	上田市立第二中学校（上田市新参町）
二四	中島　春夫	蚕三八	昭栄製糸本庄工場（埼玉県本庄市）
二四	金井　栄一	蚕三八	昭栄製糸一ノ関工場（岩手県一ノ関市）
二四	花村　治郎	蚕三八	山梨県農林高等学校（中巨摩郡玉幡村）
二三	桜井　秀利	農　五	新潟県蚕業取締所新発田支所（新発田市）
二三	大平　暁	学蚕二	信大繊維学部附属農場
二六	広瀬　幸男	蚕三一	信州大学繊維学部会田研究室
二四	飯島　祐介	学蚕二	通明中学校（更級郡篠ノ井町）
二六	若林　興孝	農　一	蚕種協同組合千曲社高崎出張所（高崎市羅漢町）
二三	嘉ノ海彦義	紡二六	柏原農業協同組合（上水内郡信濃村）
二四	山田　良人	糸一八	鐘淵静岡工場（静岡市本若松町四ノ二）
二四	近藤　謙朗	蚕三三	清水労働基準監督署（静岡県清水市江尻天神町）
二四	林　正信	紡一九	平戸橋医院（愛知県西加茂郡猿投町石平七四）
二四	湯原　喜熙	学蚕三	近江絹糸岸和田工場（岸和田市西大路町）
二四	野島　忠義	糸二七	昭栄製糸厚木出張所（神奈川県厚木市弁天町）
二四	石井　勝	蚕三六	鐘化高砂工場（兵庫県高砂市）
			大津家庭裁判所（大津市四ノ宮町）
二四	若林　清忠（旧姓宮沢）	蚕三五	北安曇農業高等学校（北安曇郡池田町）
二六	浅田　勝夫	蚕三一	野沢南高等学校（南佐久郡野沢町）

信州大學繊維學部第四回卒業生

養蚕学科

池田　和芳　愛知県蚕業試験場豊川支場(愛知県豊川市)
上原　勇作　信州大学繊維学部　蒲生研究室
大槻　英雄　宮城県蚕業試験場(宮理郡宮理町)
大井　昌次　愛知県蚕業試験場(江南市)
小川原禎寿　富士平工業K・K土壌部(東京都文京区森川町)
鬼久保哲男　信州大学繊維学部専攻科学生
塩田　衛二　愛知県蚕業試験場(江南市)
倉島　秀雄　長野県丸子実業高等学校(小県郡丸子町)
小松　茂男　高崎市民新聞社(高崎市)
佐藤　裕　埼玉製糸本庄工場(埼玉県本庄市)
塩沢　昌春　信州大学繊維学部松尾研究室
清水　昶博　信州大学繊維学部松尾研究室
高木　武人　信州大学繊維学部松尾研究室
竹内千枝子　信州大学繊維学部八木研究室
竹鼻　孝夫　〃　専攻科学生
塚田　光弘　農林省蚕糸試験松本支場(松本市四ッ谷)
手塚　俊彦　信州大学繊維学部専攻科学生
徳嵩　保　埼玉製糸浦和本社(浦和市高砂町)
中山　芳明　原松代製糸所(埴科町松代町)
西山　繁　鐘紡松本工場(松本市島内)
林　善三　自営
林　弘　信州大学繊維学部田口研究室
別府　茂　信州大学繊維学部内千曲会
堀内　孝英　〃　関研究室
宮沢喜久男　専攻科学生
室賀　明義　農林省蚕糸試験場綾部支場(京都府綾部市)
柳沢　武彦　愛知県蚕業試験場岡崎支場(岡崎市)
八幡　哲司　昭栄製糸大磯研究所(神奈川県中郡大磯町)
米沢　秀衛　信州大学繊維学部矢木研究室
石井　普　埼玉製糸秋平工場(埼玉県児玉郡児玉町秋平)
横沢　功　昭栄製糸長野蚕種製所(上田市大星台)
平山　敬二　埼玉製糸熊谷工場(熊谷市)

製糸学科

浅山　正巳　信州大学繊維学部白井研究室
青木　喜平　横浜生絲検査所(横浜市中区)
宇野　保夫　信州大学繊維学部林研究室
大久保文雄　〃　白井研究室
大平　昭人　〃　石川研究室
金井　清　〃　林研究室
香山　至郎　長野県繭検定所(松本市庄内町)
浦沢　一裕　八幡小学校(埴科郡八幡村)
久保田真親　共同募金事務所
清水　茂雄　日本乾燥KK(東京都新宿区柏木五ノ一一二田中方)
関島　郁夫　愛知県繭検定所岡崎支所(岡崎市明大寺前)
関　弥三　酒六製糸KK(愛媛県八幡浜市古町)
田中　信二　信州大学繊維学部高木研究室
土屋　慎　自衛隊幹部候補生学校(久留米市)
御子柴　睦　〃　(〃)
月岡　恒男　原製絲KK横浜出張所
松林　昭男　下伊那農高蚕木分校(下伊那郡蚕木村)
水出　友雄　信州大学繊維学部石川研究室
宮人　和夫　〃　林研究室
横内和多良　笠原製絲上田工場(上田市常入)
横関　延久　信州大学繊維学部内田研究室
吉沢　直葵　日絹製絲KK(更級郡篠ノ井町)
和田　義郎　信州大学繊維学部石川研究室
市村　亘　〃　石川研究室
和田　定男　恵南協同蚕糸KK(岐阜県恵那郡岩村町)

専攻科

飯島　荘資　長野県経済連総務課(長野市県町)
寺嶋　利一　農林省蚕糸試験場(東京都杉並区高円寺)

紡績学科

安部　暎一　牟礼西中学校(上水内郡牟礼村)
青木　茂実　第一繊維株式会社(愛知県豊橋市牟呂町松崎)
上原　浩　自宅(南佐久郡中込町大字三家)
浦野　和雄　戸倉町郵便局(埴科郡戸倉町)
大熊　良孝　酒六株式会社(愛媛県八幡浜市古町)
岡島　勤　大日本紡績株式会社関ヶ原工場(岐阜県不破郡関ヶ原町)
金井　昭夫　小県郡青木村大字夫神
木村　幸雄　中部旭紡績株式会社名古屋工場(名古屋市千種区猪高町猪子石野田)
棚沢　利一　日本オイレスベヤリング研究所蒲田工場(東京都太田区南大郷一ノ四五)
小島　脩　信州大学繊維学部専攻科学生(上田市新参町)
小宮山　奐　〃　(埴科郡坂城町横町)
小山　武　厚木編織株式会社(神奈川県高坐郡海老名町)
坂口　光男　上田市立第三中学校(上田市新田)
桜井　和一　大和紡績株式会社松原工場(和歌山県日高郡美浜町)
下原　光男　信州大学繊維学部専攻科学生(上田市鷹匠町)
春原　昌行　愛知紡績株式会社安城工場(愛知県安城市大字今)

瀬下　忠嘉
高橋　国清
土屋　克視
西山　勇
増田　実
丸山　正健
丸山　文茂
溝口　信之
宮下　識
湯原　健敏
渡辺　一
岡田　栄一

繊維化学科

有賀　淑子
池内　鼎
伊藤　智夫
宇羽野　元
小笠原真次
尾崎　行也
片桐　康
河合　良一
金子　隆一
木次　国利
小池　幸澄
児玉　侃
小山　直方
佐土　孝
白井　英男
竹原　昭
野崎　悦宏
樋口栄四郎
広瀬　邦雄
深井　英男

選科

天野　昭二
宮沢　守男
山崎　久生

専攻科

花村　吉磨

信州大学繊維学部専攻科学生(埴科郡屋代町屋代)
林紡績株式会社(一宮市八幡通六ノ一)
愛知紡績株式会社安城工場(愛知県安城市大字今)
大和紡績株式会社舞鶴工場(舞鶴市高野由里)
信州大学繊維学部専攻科学生(小県郡泉田村日向)
(更級郡稲荷山町九四〇)
近江絹糸紡績株式会社大垣工場(岐阜県大垣市林町六ノ八〇)
信州大学繊維学部専攻科学生(長野市西長野町三〇四)
信州大学繊維学部専攻科学生(更級郡更級村大字若宮)
山ノ内南中学校(下高井郡山ノ内町)
信州大学繊維学部専攻科学生(北佐久郡北御牧村島川原)
自宅(埴科郡松代町東条)
渡玉毛織株式会社(愛知県西市三条)
帝国人絹株式会社
新日本窒素肥料株式会社(熊本県水俣市陣内)同上向山寮
繊維学部繊維化学専攻科　長野県上田市袋町四五八〇　前田方
繊維学部繊維化学専攻科　長野県長野市元善町四八四
長野県臼田高等学校　長野県南佐久郡臼田町諏訪町山下美代志方
繊維学部繊維化学専攻科
長野県上田染谷丘高等学校　長野県上田市蒼影町佐藤襲正方
共栄社油脂化学工業株式会社(大阪市城東区蒲生町一ノ五三)同上
東京ビニロン株式会社上田出張所(長野県上田市銀冶町荏岡商店内)
中国コルク工業株式会社(岡山県倉敷市水江一五七五)同上社宅第二号
京都染工株式会社(京都市下京区中堂寺鍵田町四)同上社寮内
繊維学部繊維化学専攻科　長野県更級郡川中島村大字上氷鉋四九八ノ三
山陽レース株式会社御船工場(岡山県倉敷市御船町八二五)同上
長野県諏訪郡ちの町米沢中学校
近江絹糸紡績株式会社加古川工場(兵庫県加古川市尾上町)同上社員寮内
日本オイルレス・ベアリング研究所(東京都大田区南六郷一ノ四五)同上
広瀬産業
大同染工株式会社(京都市下京区吉祥院落合町三一)京都市南区唐橋南琵琶町同和寮内
五光染色株式会社(大阪市東淀川区相川町一ノ一)同上
茶周染色株式会社(愛知県一宮市高羽通二ノ十七)同上
自営　長野県小県郡神科村大字上田五四二
ミロシ油脂株式会社(東京都葛飾区本田立石町一〇)同上青砥寮内
東海製油工業株式会社(名古屋市東区山田東町二ノ一八七)同上

矢野　秦
和田　良央

蚕糸別科養蚕コース第四回卒業生

青木　良三
石島　泰
市瀬　有三
上原　芳友
上原　忍
梅沢　光祐
太田　宏一
大矢　宏
小川　保治
落合　潤
尾和　栄三
神取　章
小林　照明
桜井　秀男
高橋　重保
高橋　広次
中山　良一
名取賢次郎
細谷　竜風
保屋野美智子
松本　守人
山岸　武
山崎文四郎

信濃蚕業株式会社(長野県諏訪郡下諏訪町)
自営(茨城県結城市大字大谷瀬)
三和繊維株式会社蚕種部(愛知県安城市)
更埴地方事務所蚕糸課内埴科桑苗協同組合(長野県埴科郡屋代町)
秩父蚕糸株式会社(埼玉県秩父市)
埼玉製糸本庄工場(埼玉県本庄市)
大和組製糸所(埼玉県児玉郡上里村)
信州大学繊維学部養蚕学科学生(上田市常入)
酒大製糸株式会社(愛媛県八幡浜市五反田)
昭栄製糸株式会社
自営(長野県小県郡青木村字田沢)
埼玉製糸熊谷工場(埼玉県熊谷市石原町)
蚕種協同組合千曲社(埴科郡埴生町)
蝶矢シャツ株式会社野沢工場(小県郡田中町加沢)
昭栄製糸福島蚕種製造所(福島県伊達郡保原町)
岩手県庁蚕糸課(岩手県紫波郡日詰町)
蚕種協同組合上田社(上田市日之出町)
昭栄製糸株式会社
国学院大学学生
鐘淵蚕種製造所(愛知県春日井市上田楽)
信州大学繊維学部養蚕学科研究室(上田市常入)
埼玉製糸秩平工場(埼玉県児玉郡児玉町秩平)
信州大繊維学部聴講生(小県郡神川村)

蚕糸別科製糸コース第五回卒業生

飯島　京子
池田千代子
一ノ瀬和子
武田久米子
田中　容子
玉井　睦
中村　幸子
柳沢　敬子
山極　功
土屋　清和
宮林　清
山田　広

株式会社原松代製糸所(埴科郡松代町)
恵南蚕糸協同株式会社(岐阜県恵那郡岩村町)
日本レイヨン桐生製糸工場(群馬県桐生市)
信州大学繊維学部繊維化学科
東信製糸所(小県郡塩川村)
信州大学繊維学部製糸学科
高崎製糸株式会社(高崎市並榎町)
片倉大宮研究所(大宮市)
日本レイヨン江津製糸工場(島根県江津市)
未定
未定

昭和三十一年度信州大学繊維学部入学者氏名

養蚕学科

飯島　誠　屋代東
飯島　政信　松本県ヶ丘
伊藤　義正　宮城仙台第二
臼田　迪夫　野沢北
大見　博記　熊本南関
大矢　宏　小県蚕
小口　雄勇　岡谷南
倉田　啓而　南安農
高沼　重義　更級農
小山　陽子　小諸高
篠原　正樹　蓼科
清水　久雄　小県蚕
下田　幸男　群馬渡川
白井　毅　群馬安中
菅沼　性一　小県蚕
竹内　勝彦　屋代東
竜野　敦　上田松尾
棚橋　三郎　岐阜本巣
塚田　允　小県蚕
手塚　望生　上田松尾
土岐　正身　大阪府大手前
富田　克衛　福島保原
中村　隆幸　鹿児島中種子
堀　功　丸子実
和田　宗昭　上田松尾
以上二十五名

製糸学科

石井　勉　神奈川
兎東　伴之　平塚江南
大野　幸彦　上田松尾
加々美尋久　松本深志
梶川　昌士　大阪北野
蒲生　昌明　上田松尾
川瀬　至弘　東京日比谷
川木　孝男　京都桂
久保　幸彦　諏訪清陵
江田　善彦　大分日田
沢田　克行　愛知田口
菅原　克男　宮城仙台第一
鈴木　増男　静岡沼津東
関本　健一　岩村田
滝沢　欣宏　上田松尾
寺東　弘之　愛知安城
富田　武徳　福岡久留米
長畑　茂　東京独協学園
西沢　一男　長野北
仁科　和十　野沢北
宮崎　親作　上田松尾
森本　彰　兵庫尼崎北
矢崎　懸三　伊那北
山本善一郎　奈良畝傍
米山　精鋼　松本深志
和田　耕治　徳島城南
渡辺　溥司　群馬伊勢崎
以上二十七名

紡織学科

浅山　俊幸　長野北
飯田　耕三　松本深志
幾原　敏行　徳島小松島
岩上　宏　栃木佐野
上野　一雄　須坂西
内川　善夫　伊那北
勝野　邦夫　飯田高松
門井　滋　茨城下妻第一
川岸　弘生　石川董台
小池　了　諏訪清陵
河野　浩　北海道旭川西
小平　邦生　松本県ヶ丘
小林　侑三　長野北
小林　茂雄　長野北
鷹野　泰　岩村田
土屋　成令　神奈川横浜平沼
徳武　正人　屋代東
中沢　賢　上田松尾
藤沢　一郎　上田松尾
保坂　濃　上田松尾
間宮　広康　上田松尾
村木　義弘　青森青森
柳沢　清充　上田松尾
山岸　宏　上田松尾
若林　英雄　上田松尾
和田今朝春　上田松尾
以上二十六名

繊維化学科

新井　正彦　上田松尾
池内　洸一　上田松尾
伊藤　穣　新潟三条
石田　順亮　飯山北
市川　喜久　新潟長岡
遠藤　正雄　野沢北
大川　真澄　屋代東
小幡　裕子　千葉東葛飾
北原　匡　千葉
小林　勝利　木更津第一
近藤　道郎　飯田高松
坂井　士　上田松尾
佐藤　正義　愛知瑞陵
清水　克正　長野北
須藤　境司　栃木大田原
清木　一徳　上田松尾
高木徳治郎　北海道旭川東
高沢　弘明　山口都濃
高橋　茂美　大阪北野
須坂西
上田松尾
高橋三恵子　上田染谷
千村　一平　上田松尾
塚原　保人　長野北
長井　理　千葉東葛飾
中川　哲雄　上田松尾
橋詰寿美雄　松本深志
平波　弘　上田松尾
水野　伸夫　岐阜恵那
宮崎　敏夫　須坂西
宮下　周次　飯田高松
山浦　重男　上田松尾
山田　邦男　上田松尾
山本　正秀　上田松尾
吉谷　直　須坂西
以上三十四名

蚕糸別科（蚕蚕コース）

赤尾　邦敏　小県蚕
石原　善策　新潟長岡農
尾崎　進　小県蚕
春日　新一　屋代東
近藤　久人　屋代東
北条　三雄　茨城
久保田啓資　結城第一
小井戸章夫　下伊那農
丸子実　丸子実
小平　正巳　北佐久農
小林　学　上田松尾
斎藤　幸治　南安曇農
佐藤　久男　新潟長岡農
塩谷　邦昭　群馬蚕糸
名倉　登　愛知西尾
服部礼治郎　小県蚕
福沢千代子　大分四日市
矢野　吉彦　岩村田
山浦　菊　須坂西
山田　秀夫　更級農
山本　忠夫　宮城仙台
渡部　貫二
以上二十一名

蚕糸別科（製糸コース）

飯田まさ子　篠ノ井
池田　勝　新潟十日町
岩瀬喜巳恵　丸子実
片桐　和子　坂城
金子　瑠子　小県蚕
小市　和代　坂城
神宮　好子　岩村田
高橋　晃正　群馬蚕糸
谷　高樹　三重志摩
松井　圭次　小県蚕
柳沢　啓子　北佐久農
若林　時子　小県東部
和田　裕子　北安曇農
以上十三名

卒論テーマ追加

養蚕学科関研究室

堀内孝英、桑樹花粉母細胞の発育に於ける糖類の消長に就て

編集後記

また会報の編集当番がやってきた。別にいやというわけではないが、心のどこかでやれやれというような感じもします。原稿を集めるのも一苦労ですし、それを編集するのも容易ではありません。数少い原稿を切盛りして作った会報も大分あっちこっちのお叱りをいただき、もっと厳正中立的なものを掲載せよ、もっと同窓会のためになる記事をのせろ、編集技術が拙劣だ、といろいろあります。正直に申して多少負担を感じますが学校に居るものの務めとして一生懸命取組んでいます。

意外なお叱りもないわけでもありませんが、編集技術上お叱りをいただく面も多々あります。その点は大いに勉強したいと思っていますが、我々は皆さんからの原稿が寄せられるのを待っています。立派ないわゆる厳正中立的な、同窓会のためになるいわゆる建設的な御意見が数多く寄せられるのをお待ちしておりますそういう立派な御意見が沢山寄せられるならば、内容は充実し編集技術も向上するだろうと思います。総会は必ずしも全卒業生の意見を代表したものと言えない場合もあると思います。意見を開陳する機会を持ち得ぬが為に黙している人もあると思います。皆さん各自お持の御意見を交換させる一手段がこの会報です現在月一回発行を予定しておりますから、どしどし御寄稿下さるようお願い致します。

毎度の編集後記が何時も原稿募集で恐縮に存じておりますす悪しからず御了承下さい。

（西村記）

編集理事　田口　亮平
編集部総務　小山　長雄
編集部員　石川　博
古平　福紀
木藤　半平
土屋　幾雄
中原　武
今井甲子男
田中　茂光
西村　善次